魔法少女リリカルなのはA's～兄妹の絆～

アドニス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＡ' ｓ～兄妹の絆～

【Ｎコード】
Ｎ９４０４Ｊ

【作者名】
アドニス

【あらすじ】
これは、もしかしたらあったかもしれない話。この物語の主人公は八神きらと。ただ、愛する家族を守るために、己を犠牲にする、そんな人の話

第一話　誕生日（前書き）

他の作品を書いている途中ですが、どうしても書きたかったので書きました！お楽しみ下さい！！

第一話　誕生日

この前大きな地震が起きてからはや数週間。今日は俺とはやての九回目の誕生日だ

母さんと父さんが数年前に死んでから二人で生きてきたけど、辛いと感じた事や寂しいと感じた事はなかった。俺にははやてがいれば充分だ。

だけど、このときは思ってもいなかった。一気に家族が四人も増えるなんて・・・・・・

～～八神家　六月五日　ＰＭ１１：４５～～

「はやて～、コレは此処でいいか～～？」

「そこでええよ。後はコレを飾って終わりや」

今俺ははやて監修の元、誕生日の飾り付けをやっている。毎年思うんだが、はやてはこういったのが妙に上手だな

「さっきの電話って石田先生だろ？それで、石田先生はなんだって？」

「今度一緒に食事でも行こうって言ってたよ。何でも私たちのお誕生日祝いだって」

「そうか、それじゃ何処に行かせて貰うか決めないとな」

「うん！」

そういってお互いに笑い合う。飾りつけも終わり、今はリビングのソファーに座っている

「後はケーキが届くのを待つだけだ。とりあえずゲームでもやるかはやて？」

「うん、やろやろ。今日は負けへんで～～」

「は、面白い！今日も返り討ちにしてくれるわ！」

そういってP○3の電源を入れて、ソウルキャ○バー？のディスクを入れる

「今日はキ○クでいく」

「なら私はエ○ミでいくわ」

会話をしながらも、画面を勧めていきバトルを開始する

～～暫くお待ち下さい～～

結果
八神きらとＶＳ八神はやて
キ○ク●　　○エ○ミ

今回の勝負、八神はやての勝ち

「ま、負けた。初めて・・・・・・負けた」

「やった！勝った、勝ったで！初めて勝った！！」

負けて膝をついてる俺と打って変わって、はやては手を空に突き出して嬉しさを滅茶苦茶出してる
悔しい！！

ピンポ～ン

悔しがっていると、インターホンがなった

「ケーキ来たかな？」

そういって玄関まで足を進めた

「どちら様でしょうか？」

「どうも～、ケーキ運輸のものですけど～、こちら八神きらと様のご自宅で間違いないでしょうか？」

「あ、はい。今出ます」

玄関の鍵を開け、外に出る

「ご苦労様です」

「はい、それじゃ此方にサインか印鑑をお願いします」

「はい」

印鑑を取りにいくのがめんどくさいので、サインで済ます

「はい、有難う御座います。料金は、五千円です」

「えっと・・・・・・はい、五千円です」

「五千円ちょうどお預かりします。又のご利用お待ちしてます」

「はい、有難う御座います」

ケーキを受け取り中に入り、リビングに向う

「ケーキきたぞ～～」

「まってました！ほなら、早くご飯食べよ！！」

「待て待て。俺たちの誕生日まで後五分あるんだ。それまで待て」

はやてにデコピンをかましながら言う

「～～っ！！あいた！！いきなりなにすんねん！」

どうもかなり痛かったらしく、デコを押さえてながら文句を言ってくる

「まぁまぁ、とりあえず料理を運ぶから手伝ってくれ」

「うう～～」

「そう剥れない剥れない、後で誕生日プレゼントやるから」

「本当に！！頑張るで～！！」

現金な奴だな・・・・・・、ああ何時からお前はそうなってしまったんだい？

傍で待機しているはやてに料理を運ばせ、俺も料理を運ぶ

「時間まで後一分だ！早く席着け！」

「ちょっと待って！部屋からあの本持ってくる！」

席に着くように催促するとはやてはそういって、猛スピード（車椅子）で自分の部屋に向った

「バカ！転んだらどうするんだ！！・・・・・・待て、はやて！！」

廊下に出るがはやては部屋に着いたらしく、廊下にはいなかった

「まったく」

取り合えずゆっくり歩き、俺とはやて共同の部屋に歩いて向う。そ

の時

「キャァァアッ！」

「はやて！」

はやての悲鳴が聞こえた。その悲鳴を聞いた直後に部屋に向って走った

部屋の扉の隙間からは紫？色の光が洩れている。扉の前に着くと一気に扉を開けた

「はやて！！」

「き、きらと兄ちゃん・・・・・・」

部屋の中では、生まれた時からあった古い本が浮いていて、はやてはベッドの上で縮こまっていた

急いではやての近くに行くと、はやてを守るように前に立つ

「はやて、大丈夫だ！お前は俺が守ってやる！！」

「きらと兄ちゃん・・・・・」

もう大事な家族を失いたくない！！

《Ｉｃｈ　ｅｎｔｆｅｒｎｅ　ｅｉｎｅ　Ｖｒｓｉｅｇｅｌｕｎｇ》

宙に浮いた本から、機械的な声が聞こえてきた

《Ａｎａｎｇ》

「うう・・・・・・」

「はやて？！」

はやてのうめき声が聞こえたので後ろを見ると、はやての胸から球体が出てきた。

その球体は、宙に浮いている本に吸い込まれた

今度はほんの光が更に輝きを増したのが分かった

本を中心に、昔読んだ本に書いてあるような魔方陣が現れた

「・・・・・・っ」

はやてが息を呑むのが分かる

回転する魔方陣を背に、男女四人が頭を深く垂れて、片足を立てて

其処に居た

「《闇の書》の起動、確認致しました」

ポニーテールの女の人がそう言う

「我等、《闇の書》の蒐集を行い、主を守る守護騎士にございます」

金髪の女の人がそう言った

「夜天の主の下に集いし雲」

男のくせに犬耳をつけている、銀髪の男の人が言う

「ヴォルケンリッター、何なりとご命令を」

今度は赤い髪の、身体的には同年代の少女がそう言った

驚く。何で本から人が出てきた？それに闇の書ってなんだ？ヴォルケンリッターって何だ？

そんなことを考えていると・・・・・・

「うう・・・・・・」

「はやてっ！！」

はやてが気絶していた

第一話　誕生日（後書き）

感想など、お待ちしております

第二話　～誕生日2～（前書き）

前回の話の続きです
もしかしたら明日なのはの映画が見にいけるかもしれないので、楽しみです

第二話　～誕生日2～

はやてが気絶したので、起きるまで待って今はリビングにいる

「とりあえず、此処に座ってくれ」

「分かりました」

長い髪をポニーテールにした女の人が答えた

「とりあえず君たちの事を教えてくれないかな？そうじゃないと、お互いに話す事もできない」

「・・・・・・分かりました。私は「烈火の将・シグナム」です」

「私は「風の癒し手・シャマル」です」

「・・・・・・「紅の鉄騎・ヴィータ」」

「「蒼き狼・ザフィーラ」です」

なんか、強そうな二つ名があるな。それにしても、何でヴィータとやらはあんなに無愛想なんだ？

「それで、貴方は一体何者なのでしょうか？主と同じ姿形なのですが・・・・・・」

「ごめんごめん。俺の名前は、八神きらと、君たちの主である八神はやての双子の兄だよ」

「なんと、主の兄上でしたか」

シグナムさんが驚いているけど、説明を続ける

「ああ、でこっちがさっき紹介したかもしれないけど、俺の妹の八神はやてだ」

「よろしゅう頼むな。それときらと兄ちゃん、私のほっといて話を進めんといて」

「はは、悪い悪い。それじゃこっからははやてが話を進めてくれ。俺は準備を進めるから」

笑ってごまかす

「はいな」

話を始めたはやてを他所に、こっちはすっかり冷めてしまった料理を温め直す事にした

「とりあえずコンポタージュを温め直して、オードブルとかは電子レンジでやればいいや。あとは・・・・・もう少し、何か作るか」

冷蔵庫を見て愕然とする。材料が卵、ほうれん草、ベーコン、しかなかった

あと冷蔵庫に有るのは、前から買っておいたジュースや菓子しかなかった

「しょがない、この三つを使ってソテーでも作るか
ちなみに調味料は塩胡椒のみだ

〜〜暫くお待ち下さい〜〜

新しく作った料理を机の上に並べる。ちょうどはやても話が終わったようなので
シグナムさん達にも席についてもらって、一緒に食べる事にした
「シグナムさん、今日は俺とはやての誕生日なんです。今日から貴方達は俺達の家族なんですし、一緒に祝ってくれませんか？」
「私達が家族・・・ですか？」
「はい、はやてもいいよな？」
「きらと兄ちゃん何言ってるんや？初めからいいにきまっておるやん」
「そう言う訳ですので、祝ってもらってもいいですか？」
「・・・・・・・・私達は、これまで数多くの人を殺してきまし

た。そんな私達でも、貴方達を祝ってもいいのでしょうか？」

シグナムさんは、どこか堪えるようにそう言った

「なにいっとるんや？そないな事関係あらへん。家族が家族の事を祝うのは当たり前のことや」

はやてがそう言うと、シグナムさんを筆頭に全員が頭を下に向けて、震えていた。

よく見ると、全員が涙を流していた

静かにグラスに入った飲み物をシグナムさん達に配る

「シグナムさん、シャマルさん、ヴィータ、ザフィーラさん、涙を拭ってください

泣いていては祝えませんよ？」

「ああ、すまない」

「ごめんなさい」

「ワリィ」

「申し訳御座いませんでした」

皆が涙を拭って、グラスを持ったのを確認して、自分もグラスを持つ

「それでは、俺達八神兄妹の誕生祝いと新たな家族の誕生に乾杯」

「かんぱ～い」

「「「「乾杯」」」」

新たな家族を交えての誕生日会は、今までにないぐらいに嬉しかった

しばらくして

箸の使い方を教えながら食べ、腹が膨れてきたところで窓の外を見ると、何かがあるのが見えた

「（何だ、あれ？）はやて、なんか外にあるから見てくるな」

「きらと兄ちゃん、気をつけてな」

「はいよ」

はやてに断りを入れて窓に向う

ガラガラガラガラ

窓を開け、地面にあったスリッパを履いてそれを確認するために見に行くと、見たことの無い服を着た、女の人が倒れていた

「大丈夫ですか！！」

「・・・う、うう・・・・・・」

「大変だ！シグナムさん！こっち来て！！」

「何かありましたか！」

「この人が倒れてたんだ！急いで家の中に運んで！！」

「分かりました！」

～～十分後～～

あの後、シャマルさんの治癒魔法？っていう物で倒れていた人を治して貰った

その人は今、ソファーに座って、此方を向いている

「助けていただいて有難う御座います」

「いえ、そんなことより貴方は一体誰なのでしょうか？」

なるべく相手を刺激しないように聞く

「・・・・・私は、古代ベルカ式ユニゾンデバイス「アロンダイト」といいます」

「古代ベルカ式？ユニゾンデバイス？何ですかそれは？」

突然聞きなれない単語が飛び出てきたので、頭が混乱する

「きらと、私が説明します」

シグナムさんが横からそう言うので、説明を聞くことにする

〜〜只今説明中〜〜

「なるほど、古代ベルカ式というのはシグナムさん達が使う魔法？の種類で、デバイスというのは、その魔法を使うのに必要なもので、ユニゾンデバイスというのはマスターと融合する事によって、魔法を使えるようにする。という訳ですね？」

「はい、その通りです。それにしても、きらとはどうやら理解が早いようで安心しました」

「あ、ありがとう。それでアロンダイトさんは何で倒れてたの？」

シグナムさんみたいな美人に褒められると、何か照れくさい

「はい。私はとある研究所にいました。そこでは非人道的な研究をしており、人を人と思っていないような実験がされていました。その中で私は、数少ない古代ベルカ式のユニゾンデバイスという事で、色々されてきました。
そこで私は研究員の隙を突き、研究所を脱出しました。脱出した後の私は、私の主となるべき人の所に、ただそう祈って転移魔法を発動しました。そして、気づいたらここにいました」

「???それじゃ、その主って誰なんですか？」

「えっと・・・・・・貴方です、きらと」

えっ？俺？ホワイ？

「俺？何、俺にもなんか素質あるの？」

そういってアロンダイトさんとシグナムさん達を見る

「ええ、貴方からは膨大な魔力を感じます」

「私達は今まで色んな魔導師を見てきましたけど、きらと君みたいに大きな魔力を持った人は見たことないわ」

「あたしも、今でも信じられねぇよ」

「私もです」

「はい、貴方は今まで私が出会ってきたマスターの中で歴代最高の魔力を持っています」

「おお～～、きらと兄ちゃん凄いやん」

皆から凄い肯定されてる

こう、皆から（はやて除く）肯定されるとなんかやりたくなってくる

「ためしにユニゾンしてみてもいですか？」

ためしに聞いてみる

「いいですよ、それではユニゾンする時に騎士甲冑を想像してください」

「分かりました」

やったね！内心ではそう言って、外見ではなるべく言わないようにしよう

そういって騎士甲冑を考える。

「・・・・・・想像できた。よしやろう」

「では行きますよ」

「「ユニゾン・イン」」

このときに考えた騎士甲冑を想像する

自分の身体を光が包み込み、暫くすると光がやんだ

其処には、Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔのセイバーの甲冑の男性版をきたきらとがいた

（ちなみに、下はロングスカートではなく、普通の長いズボンです。ちなみに色は全体的に赤です）

そして、髪色と瞳の色は全体的に、薄い紅色だ

「できた・・・・・・アロンダイトさん、どんな感じでしょうか？」

『はい、今のところ異常はなく、それどころか異常がある部分を見つけるのが大変なぐらいです』

「おお、凄い凄い！！」

はやてが賞賛を送ってくれる

「凛々しいですね、きらと」

「さっきまでとは違ってなにか見違えました～」

「・・・・・中々に似合ってんじゃねぇか」

「様になってます」

「ありがとう」

マジでなんか恥ずかしい

その後、ユニゾンをときアロンダイトさんを含めた七人で祝った

第二話　～誕生日2～（後書き）

感想バンバンお待ちしております

第三話　～楽しい日々・前編～（前書き）

特にいう事はありません
あとがきにて、きらととアロンダイトの設定を書きたいと思います
それと、キャラクターの口調が上手くつかめない

第三話　～楽しい日々・前編～

誕生日会兼新しい家族の歓迎会をやってから、早一日がたった。といっても昨日は夜通し起きていたためまったく寝ていない

ちなみに他の人は全員寝ている

「（う～ん、俺にも素質があることがわかった。問題は使い方なんだよな～。今の俺はまだ素人なんだ、一体誰に教わればいいんだ？アロンダイトとユニゾンしたら、手には剣を持っていたし、やっぱり剣を持っている人に習ったほうがいいのかな？でも、基本的なことはやっぱり専門家に教わったほうがいいのかな？う～～～～ん・・・・・）」

ガチャッ

ソファーに座って考え事をしていると、誰かがリビングに入ってきた扉のほうに首を向けると、そこにはシャマルさんがいた

「シャマルさん、おはよう御座います」

「きらと君、おはよう御座います」

「こんなに朝早くにどうしたんですか、他の人たちはまだ寝てるのに？」

「ふふふ、目が覚めちゃって」

「そうなんですか」

此処でふと思った、シャマルさんなら魔法を教えてくれるんじゃないか？

そう思い、聞いてみることにした

「シャマルさん、お願いがあるんですけど、いいですか？」

「お願いですか？なんでしょうか？」

ここで思い切っていう事にする

「ええ、俺に魔法を教えてくれませんか？」

「魔法、をですか？」

「ええ、もしいざという時に魔法を使えなきゃ意味が無いですし、だから教えてくれませんか？」

「う～ん、でもきらと君は剣を使うタイプみたいですし、シグナムに教わったほうがいいんじゃないかしら？」

「シグナムさんにですか？」

「ええ、それに私って肝心なところで結構失敗しちゃうから」

「そうなんですか？」

なんか驚きだ

「そうなのよ。だからシグナムに教わったほうがいいと思うわよ」
「それじゃこうします。剣術の方はシグナムさんに教わるとして、魔法の根底的なところはアロンダイトとシャマルさんに教わる。それでいいですか？」
「分かりました。私とアロンダイトが魔法を教えてシグナムが剣を教えるですね。
シグナム達が起きてくるのを待ちましょうか」
「待ってるだけじゃ退屈なので、シャマルさん、朝食を作るのを手伝ってもらえませんか？」
「了解です♪」
手伝ってもらえるか聞いてみると、いい笑顔で了承してくれた
「それじゃ、ただ作るのも暇なのでシャマルさんに教えながらやるとします」
「ふふ、それじゃよろしくお願いしますね、きらと先生」
そう言って、朝食に取り掛かった
〜〜十分後〜〜

目の前の現状から、目を背けたくなった。確か、朝食を作っている時に、シャマルさんが作ってみたいといったから、作らせて見て、少し目を離している隙にこうなってるんだよね？

「シャマルさん、これ、何？」

おそるおそる聞いてみる

「えっと、きらと君が作るって言ってた卵焼きです」

「これが、卵焼き？」

盛り付けられた皿を見ると、其処には紫色の物体ができていた

「（う、嘘だ！コレが卵焼きだなんて嘘だ！！きっと大丈夫！見た目が駄目なだけできっと味は大丈夫なはずだ！）」

そう思い、味見してみる事にする

「そ、それじゃシャマルさん、ためしに聞いてみるけど、材料卵と塩胡椒以外に何入れたの？」

味見する前に心配なので、材料を聞いてみる

「えっと、コレとコレとコレとコレですね」

「〜〜〜っ！」

そういってシャマルさんが手に取ったのは、何処から見つけたのか

イナゴ、何だか分からない物体1，2，3を取り出した

「・・・・・・取り合えず、味見してみますね」

「はい、どうぞ♪」

うう、シャマルさんの期待するような目が痛い！

卵焼き？を箸で触ってみると、ドロッとした感触がした

「（なんか、食べたら一発で気絶しそうな気がしてきた・・・・・）」

ドロッとした卵焼き？を箸で掴む

「～～～っ！ええい！！」

思い切って食べてみる

「あれ？案外いけグハァ！！」

なんかへんな声が出た

「き、きらと君！！」

シャマルさんの声が聞こえてきたけど、それに返事する間も無くそこで意識が途切れた

〜〜数時間後〜〜

「まって下さい、六千だって？違うでしょ？三途の川の渡り賃は六文のはず・・・・・・はっ！」

俺一体何処にトリップしてた！！ばっと飛び上がると、床の上に正座させられてシャマルさんがはやてとシグナムさんに怒られてた

「あれ？どうしたのあれ？」

「きらと、起きたか。オメェがなんか前世の懺悔を始めた時はもう駄目かと思ったぞ？」

俺、そんなにやばかったの？

「一応確認するけど、ザフィーラさん本当？」

「本当です。私も心配致しました」

本当らしい。とりあえずシャマルさんを助ける事にしよう

「はやてー、今日はシグナムさん達の服を買いに行くんじゃなかったのか？」

「シャマルは何でイナゴとかなんかもう分からん物体をいれ、ってきらと兄ちゃん目覚めたんか？！よかった〜、きらと兄ちゃんがうわごとでなんか懺悔を始めたとこはもう駄目何やないかと思ったよ〜」

それ、さっきも聞いた

「そ、それより、私達の服を買うという事ですが、一体どういう事ですか？」

「どういう事って、何時までもそないな格好しとったらいくら暖かいとはいえ、風邪ひいてまう。それに何時までもそないな格好しとったら駄目や」

「ですが、なんで我々に服を買うのですか？我々は風邪というものをひかないのでこの格好でも大丈夫です」

その言葉に少し呆れる

「何を言ってるんですかシグナムさん、例えその格好でいても風邪を引かないからって駄目ですよ。それに昨日も言ったとおり、俺達はもう家族なんですから」

ここまで言ってふと気になることがある

「そういえば、アロンダイトは？」

昨日、ご飯を食べている途中、アロンダイトが「敬語は止めて下さい」としきりに言うので、アロンダイトに対しては敬語をやめた

「彼女でしたら、朝早くにこの町が良く見える場所を探すといって出て行きましたが・・・・・・」

「シグナムさん、本当ですか？」

「はい、朝早くに一度起きた時に彼女に会ったので、そういってい

ました」

「有難う御座います、それじゃ俺は探しに行って来ますのでシグナムさんたちは上に何か着てはやてと一緒に服を買いに言って来て下さい。はやて、頼んだぞ」

「了解や。ほな、はよう準備していこか～」

はやてのその言葉を尻目に、アロンダイトを捜しに外に出た

第三話　～楽しい日々・前編～（後書き）

～～八神家の居間～～

「えっと、此処ではいろいろな事を話すみたいです」

「そうみたいやね～～、せやけど一体何を話すんや？」

「主はやて、私が説明を」

「お、シグナム頼むわ～」

「はい、此処では寄せられた感想に対する返事や、色々な設定を書く所のようです」

「なるほど、それじゃ今回は一体何を話すんですか？」

「はい、今回はきらととアロンダイトに関する説明のようです」

「きらと兄ちゃんとアロンダイトの？」

「はい、資料は此方に」

名前：八神きらと

性別：男

身長：１４４ｃｍ

体重：３３ｋｇ

容姿：双子なので、はやてと同じ

性格：基本的に穏和。だが、大事な家族は危険な目に遭わされそうになった時や、危険な目に遭わされたりした場合は、それをやって奴に一切の容赦無しに相手を攻撃する。
はやて以外には丁寧語？で話す（シグナム達限定）

ユニゾン時：髪と瞳が薄い赤色になる。騎士甲冑はＦａｔｅ／ｓｔａｙ ｎｉｇｈｔのセイバーの戦闘時の服を男物にした感じで手甲と具足をつけている（騎士甲冑も全体的に赤色）

パートナー

名前：アロンダイト

性別：女

身長：目測で、１６５ｃｍ（小さい時は２０ｃｍぐらい）

体重：大体、４０ｋｇぐらい

容姿：髪は腰まであり、色は赤色。瞳の色も赤色。どこか大人しい顔つき

性格：大人しい性格。あと主の命あらばどんな事でも聞く。どんな

人でも丁寧語?で話すが、主が敵と認めた敵には無口になる
ユニゾン時：ユニゾンした時は、赤い刀身を持つ両刃の片手剣になる（両手剣の名前はアロンダイト）（他の部分も全体的に赤色）カートリッジシステムはボルトアクション式である
長さは、シグナムの持つレヴァンティンと同じぐらいである

「なんか結構普通なのな」

「どこがや、きらと兄ちゃん少し怖いわ」

「はい、確かにきらとは少し怖いですね」

「そうか?家族が傷つけられたら誰だって怒るのわ当たり前だろ?」

「・・・・・・きらと兄ちゃん」

「・・・・・・きらと」

「おっと、終わりも近づいてきたようですし、そろそろお開きにしましょう」

「せやな」

「そうですね」

「それでは、次回でお会いしましょう」

「「「さよなら！」」」

「・・・・・・私達の事、忘れられてない？」

「・・・・・・忘れられてるな」

「・・・・・・忘れられてるな」

「・・・・・・忘れられてますね」

「でも次回こそは！」

「「「「絶対に出る！！」」」」

第四話　～楽しい日々・中編～（前書き）

時間が無いので三部構成になっちゃいました

第四話　～楽しい日々・中編～

「（確か、シグナムさんの話だとこの町が良く見える場所に行くって言ってたから、
多分あそこだ）」

頭に思い浮かべているのは、この町の高台にある公園だ。あそこなら多少天気が悪くともこの町が一望できる

家からあそこまではかなり距離がある。急いでもしょうがないが、走っていくことにした

「（それに、いい運動になるしな）」

そう思い、高台まで走っていった

～～十三時間後～～

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・危なかった！何なんだよアレ！！」

マジで何なの、アレ！？とても人間とは思えない動きだった。その場から逃げたはいいけど、追いかけてくるし足は滅茶苦茶速いし、もう逃げるのに精一杯だよ！！

「にしもて、よくこんなに長く走れたな？」

そう、自分でも驚くぐらい長く走れたのだ。いつもだったらちょっと長く走っただけでスタミナが切れてしまうのに

「まぁいいや。とりあえず目的の高台に着けた訳だし」

とりあえず辺りを見渡す。すると、目当ての人物は直ぐに見つかった

「おーい、アロンダイトー」

高台の端のほうで景色を見ていたアロンダイトを呼ぶ

呼ばれたアロンダイトはこちらを向いてただ一言

「あ、マスター」

そう言った

「アロンダイト、もうご飯の時間だから帰ろう」

「もう、そんな時間なのですか？」

「ああ、さっき時計を見たけど今は八時ちょうどだったし、俺も朝から何も食べてない。だから早く行こう」

本当はシャマルさんの料理を食べたけど、アレは食べたうちに入れないで置こう

「そうでしたか、マスターのお手を煩わせて申し訳有りません。直ぐに帰りましょう」

「そうだな、ほら行こう」

「はい」

アロンダイトを横に、家まで歩いて帰ることにした

〜〜道中〜〜

「それでさ、アロンダイトの名前を決めたいと思うんだけど？」

「私の名前ですか？ですが私には既にアロンダイトと言う名前が・・・・・」

「だからアロンダイトじゃなくて新しい名前を決めるの！！分かった！」

「は、はい」

とりあえず名前を決めると言ってアロンダイトに返事をさせる事に成功した

「さて、名前なんだけど何がいいかな・・・・・・」

フィリス、アリス、シャイン、フロスト、レイン、フレア、サン、エレナ、リリィ

アイリーン、エリス、と色々あるがどうするか・・・・・・

「赤い髪と赤い瞳・・・・・・それじゃ新しい名前はフレアだ」

「フレア、ですか？」

「ああ、今日からお前の名前はフレアだ」

「フレア、フレア・・・・・・」

新しい名前をつけるとフレアは自身の名前を確かめるように何度も何度も呼んでいた

「ほら、何時までやってるんだ。早く行くぞフレア」

「はい、マスター！」

この時のフレアの笑顔は輝いていた

さて、昨日の夜と朝で食料を殆ど使ってしまったので買い物をすることにする

「さて食料を買いに来たんだけど、言っとくけどマスターとかそういった言葉は使うなよ？ただでさえこの世界ではそんな言葉は使われていないんだ。分かった？」

「はい、分かりましたマス・・・「だからマスター言わない」あ、すみません」

「あくまでフレアはおれの付き添いってことでついてきてくれ、とりあえず行くぞ」

「はい」

フレアを後ろにスーパーに入った

ミッション発令！！
ミッション内容：フレアをつれて買い物を無事に終了させよ！！
成功条件：無事に買い物を終わらせる
失敗条件：フレアにマスターと呼ばれたら
では、成功を祈る！！
ミッションスタート

ファーストミッション：野菜コーナー

「まずは、大根と人参、白菜、玉葱、じゃが芋、を買ってと・・・・・・、お、今日はじゃが芋が安いや」

カートに乗っているかごに野菜をポイポイ入れる

「あの、マス「シャラップ、その言葉は言うなって言ったよね」すみません」

なんでマスターって言おうとするかな～～？いい加減慣れてもらわねば

セカンドミッション：精肉コーナー

「とりあえず、牛肉とばら肉と腿肉と胸肉でも買うか」

今日来る前にチラシを見たのだが肉が全品５０％だった

「あの、マ「だからそれ言うな」すいません」

お願い！！お願いだからマスターって言おうとしないで！！何でこの子はマスターって言おうとするの！！

サードミッション：生魚コーナー

なんかもう疲れてきた。フレアがマスターって言おうとするから止める度に疲れてくる

「とりあえず、秋刀魚と鱈と鯵と鮭を買う事にする」

コレで買い物は終わりだ。やっとコレで帰れる、そう思って油断してたのが悪かった

「あのマスター、コレで終わりですか？」

ピシッ！！

言われてしまった。

恐る恐る周りを見てみると主婦の皆様がヒソヒソお話をしております

「・・・・・・ヒソヒソ（あの女の子、八神さんの所のお子さんの事マスターって言ってたけどどういう関係なのかしら？）」

「・・・・・・ヒソヒソ（私の聞いた話じゃなんかあの女の子手篭めにされてるらしいわよ）」

「・・・・・・ヒソヒソ（それ本当！あの歳で女の子を手篭めにするとかどういう子なのかしら）」

「・・・・・・ヒソヒソ（普段は品性方向なのにね～）」

なんかもう、俺の周囲の評価がガタ落ちしてる気がする

なんかもうその場にいられなくなったため、レジに向かい急いで会計を済ませ帰った

〜〜自宅〜〜

俺は家に着くなり冷蔵庫に食材を入れて机に突っ伏していた

「ヴァァァ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

ちなみにはやて達は先に家に帰っていた

〜〜とりあえずシグナム視点〜〜

私が家に着きくつろいでいると、きらとが帰ってきた

「きらと、お帰りなさいませ」

「うん、ただいま!!」

きらとは何かあせっているようで、私の挨拶に簡単に返すとそのまま食料を冷蔵庫にいれ、机に伏せてしまった

「ヴァァァ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

伏せるなり奇声を上げていた

きらとには主はやてと共に我等を家族として扱ってくれた恩義がある。今こそ恩義をはたしたい

「（シャマル、きらとに一体何があったと思う？）」

そこでまず、念話でシャマルに聞いてみることにする

「（そうね、何か恥ずかしい事でもあったんじゃないかしら？）」

「（そうか・・・・・・）」

だが、あれはただ恥ずかしい事があっただけではないと思う

次にヴィータに聞いてみることにした

「（ヴィータ、きらとの事なのだが何があったと思う？）」

「ああ、知らねぇよ。どうせアイツがその内自分で解決すんだろ？）」

「（一理あるな・・・・・・）」

とりあえずザフィーラに聞いてみることにした

「（ザフィーラ、きらとに一体何があったと思う？）」

「（おそらく恥ずかしい事でもあったのだろう）」

「（なるほど）」

他の守護騎士の意見を聞いた所できらと本人に聞いてみることにした

「きらと、一体何かあったのですか？」

「シグナムさん？あのね、あのね・・・・・・」

きらとが顔を上げるときらとは涙を流していた、何故か自分の顔が赤くなるのが分かる、クッ！不覚にも可愛いと思ってしまった

そして次の瞬間

ダキッ！

「な、ななななな！！」

「おお！！」

「あらぁ♪」

「・・・・・・（見て見ぬ振り）」

「おいおい、何やってんだよ」

（ちなみに上からシグナム、はやて、シャマル、ザフィーラ、ヴィータの順番である。フレアは疲れたのか寝ている）

きらとが抱きついてきた

「き、きらと?！何故いきなりだだだ抱きつくのですか！?」

「だって、だって、フレアが～～。シグナムさ～ん、慰めの意味も込めてこのままでいさせて～～」

心を落ち着かせる

「そ、それでフレアがどうしたのでしょうか？」

（ちなみに、なんでシグナム達がフレアの名前を知っているかと言うと、フレア本人が帰ってきた時に言ったからである）

「フレアがね～、買い物してる最中はマスターって言うなって散々言ったのに、マスターっていったんですよ？そしたら言われた瞬間に周囲にいた主婦の皆さんからは色々言われるし、俺のイメージガタ落ちですよ？」

「それは・・・・・・」

きらと、ご愁傷様です

「シグナムさ～ん、お願いあるんですけどいいですか？」

きらとを慰める意味で聞いてみる

「何ですか？」

「今日は一緒にお風呂に入ってそして一緒に寝てください」

その言葉に今にいた全員が衝撃を受けた

第四話　～楽しい日々・中編～（後書き）

「今日は酷い目にあった」

「まぁまぁ、フレアちゃんも悪気があったみたいじゃないし、許してあげたらどう？」

「まぁ、いいですけど」

「きらと兄ちゃん、元気ださなあかんで？この話を見てくれてる人の為にも」

「そうだよな～～、次回には元に戻ってると思う」

「それじゃ、次回でお会いしましょうか？」

「「「さよなら」」」

「どうやら順番に出番が来るらしいな」

「そうだなぁ」

「そうだな」

「次回は一体誰が担当なのだ？」

「多分あたしじゃねぇか？順番的に」

「そうかもな」

第五話　～楽しい日々・後編～（前書き）

これからの書き方なんですが、三人称、一人称（主人公ｏｒ他の主要キャラ）という風に分けたいと思います
それと、ドイツ語のネットでの書き方が分かりません。誰か教えて下さい

第五話　～楽しい日々・後編～

きらとの突然の一言に皆が驚く

「き、きらと!?それは一体どう言う事ですか!?」

「そうですよ、きらと君」

「テメー、突然何言ってんだ!?」

「確かに、少しそれは行き過ぎでは?」

守護騎士が口々に言う中、はやてだけは落ち着いて現場を見ていた

「はぁ、きらと兄ちゃんの悪い癖がまた始まってもうた・・・・・・」

「「「悪い癖?」」」

シグナムはきらとの事で精一杯で、はやての言葉に反応する暇が無かった

「せや、きらと兄ちゃんはな昔から恥ずかしい事があったり寂しかったりしたらな

近くにいる人に甘えてくるんや。男の人が近くにいた場合はな、色々相談すんねんけど、女の人が近くにいた場合はなとことん甘えてまうんやよ」

「・・・・・・それって、なんかたちが悪いですね」

「・・・・・・そうだな」

「・・・・・・・ああ」

「でもな、相談したり甘える言うてもそれには条件があんねんで？」

「「「条件？」」」

三人が異口同音でその言葉を言う

「うん、それはな男の人の場合は尊敬してる場合、女の人の場合は大好きってきまっとんねん」

「そ、それじゃあ」

「きらとがシグナムに抱きついてんのって」

「ああ」

「多分、シグナムの事が大好きなんやろな～～」

はやてのその言葉に沈黙が走る

「・・・・・・とりあえず、きらと君がああなったらシグナムを生贄にしましょうか」

「・・・・・・っていうかシグナムしか生贄に使えねぇじゃねぇか」

「・・・・・・シグナム、すまん」

「・・・・・・とりあえず、私らは晩御飯の準備でもしよか～～」

「は～い」

「おう」

「はい」

「お前等！！私を見捨てるきか！？」

その発言を聞いたシグナムがシャマル達に食って掛かる

「ナンノコトデショウカ？」

「アタシラハナニモシラネェ」

「タシカニ、ナンノコトダ？」

全員何故か片言

「お前等！完全に私を見捨てる気だろ！！」

「ほな、早く夕食の準備しよか～」

そうってはやてはシャマル達をキッチンに連れて行った

「シグナムさ～ん、早くお風呂に行きましょ～う」

「き、きらと！本当に一緒に入るのですか！？」

「当たり前じゃないですか～～、ほら行きますよ～～」

「て、ちょ、力が強い！！その体の何処にそんな力が！？」

「早速行きましょう～」

「あ、ちょっと、まって、あっ・・・・・・！！」

三十分後、何処か恍惚とした顔のきらととシグナムがリビングで一緒にいるのが発見された・・・・・・

～～次の日～～

（視点、戻します）

ＡＭ９：００

「さて、シグナムさん」

「なんでしょうかきらと」

俺達は今、机を挟んで対峙している

「俺に剣を教えてほしいのですが」

「剣をですか？」

「はい。俺にも魔法の素質があることが分かりましたし、それにフレアとユニゾンすると武器が剣になる訳ですから剣を教えて欲しいんです」

「確かに私も剣を使うのである程度は教えられるとは思いますが、私でいいのですか？魔法の事でしたらシャマルやフレアの方が適任だと思いますが・・・・・・」

「ええ、それでしたら魔法はシャマルさんとフレア。剣はシグナムさんに教えてもらうって言う風に昨日シャマルさんと相談しました」

シグナムさんは顎に手を当ててかがえるような格好をすると

「・・・・・分かりました、剣でしたら私が教えましょう」

「やった！！有難う御座います！！」

「その代わり、教えるからには厳しく行きます。それでもいいですか」

その言葉に一瞬たじろぐが直ぐに元に戻し

「それでも大丈夫です！！やるからには最後までやります！！」

「分かりました。それでは早速今日からやりましょう」

「はい！！」

「とりあえず、人気がないところはありますか？この家でやるには少し危険がありそうです」

「そうですね、少し遠いですけど広くて普段人が来ない公園があります」

「そうですか、それでは早速行きましょう。それとシャマル、お前も来い。ヴィータとザフィーラは主はやての手伝いと警護を頼む」

シグナムさんはそう言いながら歩いていったので後に続いて歩いた

「分かりました」

「「分かった（心得た）」」

リビングからそんな声が聞こえた

〜〜遠い公園〜〜

家から離れた公園に着いた

「それでは体力づくりの為に、この公園を一緒に五周走りましょう」

「いぃ！！」

口から変な音が出てしまった。変な音も出るわ！！だってこの公園一周が約一キロもあるんだぞ！！

「俺、其処まで体力に自信が無いんですが・・・・・」

「剣を振るにも先ずは体力が大事です。肝心な時に体力が無くなり剣が振るえなくなっては元も子も有りません」

「確かに・・・・・・」

その言葉に頷く。体力が無くちゃ意味が無いもんな

「分かりました、頑張ります！！」

「いい返事です、それでは行きましょう」

「はい！！」

大きな声で返事をするとシグナムさんと一緒に走り始めた

「頑張って下さいね～」

シャマルさんが応援してくれた

～～一週目～～

「ハッハッホー、ハッハッホー、ハッハッホー」

以前長距離を走ったときに使った呼吸法で走る

「きらと、その呼吸の、仕方は、何ですか？」

走っているためか、シグナムさんが途切れ途切れに聞いてくる

「この、呼吸法は、以前走った時に、見つけた、自分なりの、呼吸法です」

「なるほど」

それだけを話すとまた黙って走り始めた

それにしても、何気に早く走ってるけどまだ息切れとか起きてないな。結構走れるんじゃね？・・・・・・そう思っていた時期がありました

〜〜二週目〜〜

少しだけ息が切れてきた、きっとまだ大丈夫だ！！

〜〜三週目〜〜

ヤベェ、脇腹が痛ぇ。それに息も結構切れてきた

〜〜四週目〜〜

ゼェ、ゼェ、ゼェ・・・・・・マジで死ぬ

〜〜五周目〜〜

コレで終わり・・・・・・ウォオオ！！！

そう思ったら何処からか力が沸いてきて、一気に走った。そしたらシグナムさんも一気に走ってきた

～～終了～～

「ゼェー、ハァー、ゼェー、ハァー・・・・・もう、走れない（バタッ）」

それだけを言うと、草むらに倒れこんだ。草が調度いい位に冷たく、ヒンヤリしていて気持ちいい

「きらと、大丈夫ですか？」

シグナムさんを見ると、汗を掻いているもののピンとしているシグナムさんがいた

「シグナム、さん、どれだけ体力、あるんですか」

「多分、無尽蔵にあるのでしょう」

・・・・・どんだけですか？

「きらとくん、シグナム、お疲れ様。はい、これ」

「あ、有難う御座います」

「すまないシャマル」

そう言ってシャマルさんの手に握られていた、飲み物（スポーツドリンク）を上半身だけ起こして受け取る

「（ゴクッ、ゴクッ、ゴクッ）・・・・・ふ～、楽になった～～、

シャマルさん有難う御座います」

「いえいえ」

「きらと、あと少ししたら素振りをしましょう」

素振り？素振りといっても振るものがないんですけど・・・・・・

「コレを使って素振りをします」

そういってシグナムさんが見せたものは、何処から見つけてきたのか西洋の剣のレプリカ？だった

「シグナムさん、コレって物とか切れないですよね？」

「さぁ？私もさっき落ちてたのを見つけただけですから」

なんかやばい予感がする

「シグナムさん、ペットボトルを投げるのでそれを切ってください」

「？？分かりました」

ペットボトルを投げてみる

シュッ！！

ペットボトルはものの見事に切れ味綺麗に切れてしまった

「・・・・・・」

「きらと、どうしました？」

「シグナムさん、それ少し貸してください」

「どうぞ」

シグナムさんから剣を受け取ると、直ぐにポケットからハンカチを出し握り手の部分を拭き地面に置く

「シグナムさん、シャマルさん、いいですか。この剣を絶対にいじらないで下さいね、今からあるところに電話して然るべき対処をしていただくので」

「「はい」」

二人の返事を聞くと、もって来た鞄から携帯電話をだす

ピッポッパッポッ、プルルルルル、プルルルルル、ガチャ

「はいこちら海鳴警察ですが」

「あ、もしもし警察ですか？いま二丁目の〇△番地にある□☆公園に本物の剣が置いてあるので直ぐに取りに来て下さい。このまま放置していたら余りにも危険です」

「分かりました、それでは直ぐに向うのでその場所を動かないで下さい」

「はい、わかりました」

ピッ

それだけ言うと電話を切った

「今警察を呼んだので、この場から離れないで下さいね」

それだけ言うと、警察の人を待った。

暫くすると警察の人が来て、剣を回収していった、この剣の持ち主を知らないかなど聞かれたが知らないといって、その場はやり過ごした

第五話　～楽しい日々・後編～（後書き）

今回は時間が無いため、あとがきコーナーを休ませて頂きます

第六話　～修行って結構辛いのね～（前書き）

更新が遅くなってしまって申し訳有りません。
最近卒業式の練習やらなんやらで遅れてしまいました。ではどうぞ！

第六話　～修行って結構辛いのね～

警察を呼んでから色々あったが取り合えず事が済み、シグナムさんとの修行を再開させる

「えっと、さっきは色々ありましたが改めてよろしくお願いします」

「はい、此方こそ。それより何を使いますか？ちょうどいい木の棒がありません」

「ふっ、こんな時の為に持ってきておきました！」

そう言って背中にずっと背負っていた色の白い長い入れ物を背中からどかし、地面に置く

「それは？」

「これはですね、この国の国技である剣道という武道に使う竹刀というものです」

袋から竹刀を2本取り出す

「コレを使ってやりましょう。はい、シグナムさん」

片方をシグナムさんに渡す

「有難う御座います。ではまず、竹刀、でしたか？それを振りましょう」

「振るってどんな風にですか？」

「そうですね、上から下に切り落とす様にやってみてください。それで何処が悪いか分かれば治す事が出来ます」

「分かりました」

そう言って竹刀をテレビで見た見様見真似で構え、振り下ろす

「セェイ！ヤァ！！トゥ！！！デリャァ！！！！」

自分が思う気の入る掛け声で竹刀を振り下ろす

「きらと、脇をしっかり締めて振ってください」

「分かりましたぁ！！ウォオオリャァァアア！！！」

アドバイスに返事をしながらも只管に一心不乱に剣を振る

「この野郎！！畜生！！やってみせる！！！」

自分でもわかるぐらいハイテンションになっていた

〜〜十分後〜〜

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ・・・・・・」

うん、やっぱあれだね。テンションがハイになってると疲れなんて無いね

でもテンションが元に戻るとそれまでの疲れが一気に来るから疲れた

「そういえば、フレア」

さっきから空気だったフレアに話しかける

「何でしょうか、マスター？」

「あのさ、剣以外の、フォームに、なれる？」

「そうですね・・・・・・最大で四つまでなれます」

四つか、一つは剣で決まってるから、残りの三つは・・・・

「ふぅー、よし息もだいぶ落ち着いてきた。フレア、一回ユニゾンしよう。残り二つのフォームを決めたい。シグナムさんもいいですか？修行を中断させてしまうようで悪いですけど・・・・・・」

その事を伝えるとシグナムさんは少し考えるような顔をすると、こう言った

「分かりました。私とシャマルは少し離れていましょう。シャマル、いくぞ」

「分かったわ、シグナム」

それだけを言うと二人は少し遠いところに移動した

「それじゃいくぞフレア」

「はい」

「「ユニゾン・イン！！」」

その言葉と共に体が光に包まれ、身体に騎士甲冑を纏う。だが、そのデザインは今までと違うものだ

手には指が出ているタイプの手甲を装備し、足には革のブーツを履いており、胸にはプレートを装備している。後の部分は前と同じセイバーの男版のままだ

「よし、コレでＯＫだ。次はフォームを考えよう。フレアは何がいいと思う？」

フレアに意見を求める

『そうですね、２ｎｄフォームにはこの世界で言うトンファーはどうでしょうか？』

「トンファー？でもそれだと敵に剣以上に敵に接近しなきゃならないし、危険じゃないか？」

『その点は大丈夫でしょう、マスターには類稀な魔力があります。魔力が多ければ多いほど騎士甲冑の防御は高くなります。余程の事

が無い限り露出している部分以外は傷つく事は無いでしょう』

「そうなのか？」

『はい、マスターの総魔力量は詳しく調べなければ分かりませんが、ＳＳランクでしょう』

「ＳＳランク？」

此処に来て知らない言葉が出てくる。魔力ランク？ＳＳ？

『魔力ランクというのは個人が持っている魔力量のランクです。ランクはＥからＳＳＳまであり、その中でマスターはＳＳランクの魔力を持っています』

「それって、要するに凄いの？」

『はい、以前にも話したと思いますが、私が捕まる以前の歴代のマスターの中で過去最高の魔力を持っています』

「そうか、じゃあ２ｎｄフォームはトンファーでいい。３ｒｄフォームは中距離専用でいいだろう。なぁ、銃って出来るか？」

『銃ですか？どうでしょう、やってみなければ判りません』

「それじゃこの世界の散弾銃（ショットガン）をモデルに、そうだな・・・・・・ベネリＭ４をモデルにデバイス風に構成して作っといてくれ」

『分かりました。それにしてもマスター、一体何処からそういった

銃の名前などを調べてくるのですか？』

フレアが聞いてくる

「ああ、俺ってさ銃とかそう言うの好きだからさ、良くパソコンとかで見てるんだよ」

『そうなのですか？』

「そうなのですよ。後の一つは後でいいや、とりあえず修行の続きをしよう」

『そうですね、それでこのままでいいのですか？』

「とりあえずユニゾンアウトしよう」

「「ユニゾン・アウト」」

フレアとのユニゾンをとき、元の姿に戻る

「シグナムさーん、もういいですよー」

そう言うと、シグナムさんはシャマルさんを連れて戻ってきた

「きらと、もういいのですか？」

「はい、それにそろそろ家に帰らないとはやてが心配しますし、だからもう帰りましょうか」

そう言って腕につけていた時計を見せる。時刻は午前八時三十分を

指していた

「そうですね、それでは帰りましょう。修行の続きはまた次回に」

「はい、それじゃ帰りましょう」

そんな事を話しながら家に帰った

〜〜自宅〜〜

「ただいまー」

「きらと兄ちゃん、お帰り〜」

「主はやて、只今帰りました」

「はやてちゃん、ただいま〜」

「シグナムとシャマルもお帰り〜」

家に帰りただいまをいうと、はやてはいい声で返してくれた

「はやて、俺シャワー浴びてからご飯食べるよ。朝ごはん出来てるだろ？」

「うん、出来取るよ。お風呂にお湯張ってあるから浸かっとき〜」

おお～、湯を張ってあるのか。これで少しだけどゆっくり出来るわ～

「マジで？有難う、それじゃ行って来るよ」

それだけを言うと一回兼用部屋に入り着替えを持ってきた後、風呂に入った

～～二十分後～～

「気持ちよかった～、シグナムさんも入ってきたらどうですか？」

「そうさせてもらいます」

それだけを言うと、シグナムさんは入っていった

「今日の朝ご飯は何はやて？」

「今日の朝ごはんはな、鮭に漬物に白米にお味噌汁や」

「俺の好きなのばっかじゃん、はやて有難うな～」

はやての頭を撫でながら言うと、はやては顔を赤らめて

「きらと兄ちゃん、ちょっと恥ずかしい／／／／／」

そう言って顔を赤らめて俯いてしまった

「恥ずかしがってんなよ、はやて（ピンッ）」

「（ビシッ）あいたー！！いきなりなにすんのや、きらと兄ちゃん！！」

「ごめんごめん。とりあえず頂きます」

漬物を箸で掴み口に運ぶ

「相変わらず上手いなこの漬物」

「そやろ？なんたって私が一生懸命漬けたんやからな」

胸を張って言う

「そうだな～、前にやった時は失敗して滅茶苦茶へんな味だったけどな」

「な、何言うとんのやきらと兄ちゃん！！失敗なんかしてへん！！」

そう、それは今から二年前の事だ。はやてがテレビを見て何を思ったか突然「私も漬物漬けてみる！！」そう言って糠漬けやらでっかい黄色いおけを買ってきたりしていた。

そして実際に作ってみたらはやての奴、漬物漬ける期間を間違えてへんな味の漬物が出来てしまった。ま、後にも先にも失敗はコレだけなわけだが

「はいはい、そう言うことにしといてやるよ。そう言えば、ヴィータとザフィーラさんは？」

「うう～～～、ヴィータは退屈ゆうて散歩に行ったよ、ザフィーラ

もヴィータに着いて行っていってしもうた」

ザフィーラさんまで行っちゃったのか、格闘訓練を習いたかったんだけどな～～残念だ

そんな事を話しているうちに朝ごはんを食べ終わってしまった

「ふぅ～、食べた食べた。はやて、少しだけ寝るからさ、ザフィーラさん達が帰ってきたら起こしてくれる？」

「分かったで、ザフィーラが帰ってきたら起こせばいいのやな？」

「おう、それじゃ」

言いながらソファーに寝転がり、眠りについた

第七話　～無茶のしすぎは良くないですね～（前書き）

久々の投稿です。少ないかもしれませんがこの作品を楽しみに待っていただけていたらうれしいです

第七話　～無茶のしすぎは良くないですね～

チュン、チュン、バサバサバサ

鳥の鳴き声と羽ばたき音によって目が覚める。窓を見ると陽が昇っていた

「（スンゲー寝てたな俺、誰か起こしてくれてもいいもんなんだけどな・・・・・・）」

ソファーで寝たまま放置されていたらしい。上半身を起こすと身体に布が掛けられていた。

「誰かが掛けてくれたのか、ありがたいな」

時計を見ると、九時だった

「自分から言ったのに、まさか二日目からサボってしまうなんて・・・・・、しょうがない、自分で今日は鍛錬するか」

フレアに念話で話しかける

『フレア、聞こえるか？』

『あ、マスターお目覚めになりましたか』

『今何してるの？』

『はい、今は自宅周辺を散歩しています』

『そうか、今から実際にユニゾンして訓練したいから戻ってこれるか？』

『分かりました、数分で戻れると思いますので少しの間お待ち下さい』

『分かった』

念話を打ち切る

「あと数分か、その間に準備運動をしておこう」

体操やストレッチで身体を解していく

充分に身体を解し終わり、暇なのでスクワットをやっていると

ガチャ

どうやら帰ってきたみたいだ

「フレアか？」

「はいマスター、只今帰りました」

フレアかと思い呼びかけると、やはりフレアだったみたいで呼びかけにこたえながら居間に入ってきた

「早速だけど、２ｎｄフォームでユニゾンするぞ。今日はさっきも言ったと思うけど、実際にユニゾンして訓練をしたいからさ」

「分かりました」

フレアはそう言いながら庭に出て、僕の横に立った

「「ユニゾン・イン」」

掛け声と共にユニゾンし、騎士甲冑を纏う。手にはトンファー型のデバイス？が握られていた

「あのさ、思うんだけどさ、この街にももしかして他にも魔法使える人っているの？」

前から感じていた気配はもしかして他に魔法を使える人でもいるのかな？そう思ってフレアに聞いてみた

『いると思われます。ただ魔力を持っているだけならば際限なく無意識に放出されていますが、この街にある魔力は纏っていますので、恐らくデバイスを所持し、魔法を使えるのでしょう』

やっぱりか

「この街にいる人の魔力量は大体どの位なの？」

『はい、詳しく調べないと分かりませんが恐らくランクＡには相当されると思われます』

その時、何故か見たことの無い茶髪のツインテールの少女が、手に持っている機械の杖から桜色のビームを出している光景が頭に浮かんだ

「ブルル・・・・・・・!!!」

『マスター、どうしましたか？』

「い、いや、なんでもない。それよりも早くやろう、何か的を出してくれないか？」

『それでは、スフィアを出します。コレは全て打ち落とされるまでずっと動き続けます。速度は秒速一キロで動きます』

・・・・・・早いんだか遅いんだか分からない速度だな

「まぁいいや、早速頼む」

『はい、数はどのくらいにしますか』

「始めてやるからとりあえず五個から頼む」

『分かりました』

言うと、目の前に色の濃い白のスフィアと呼ばれる球体が五つ浮かんでいた

「これを殴って消せばいいんだな？」

『結果的に言えばそうなります』

簡単なことじゃないか、当たるか分からないけど

「それじゃ開始してくれ」

『分かりました』

スフィアが不規則に動く。なんか、当たりそうで当たりそうにないな

「まぁいいや、やってやる」

そう言って見様見真似でトンファーを操りスフィアを落とそうとする

右手に持つトンファーを手首の動きで回転させながら近くにある、スフィアに殴りかかる

が、スフィアは当たる直前に右に移動してしまい外してしまう

「ちっ」

すぐに迎撃するように半回転させながら移動したスフィアを殴る。攻撃はスフィアに当たり、消滅する

「まず一つ目！！」

すぐさま視界の端に移っていたスフィアに目標を移し、左手で下から殴りあげるように攻撃するが、今度はさっきのより動きがすばやく外れる

「このっ！」

すぐ様逃げたスフィアを攻撃しようと上を向き、ちょっと上に跳んで攻撃するが
また逃げてしまい外れる

「くそっ！！」

そんな調子でスフィアを破壊する訓練は続いた

ーーー時間後ーー

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ・・・・・・畜生！やっと終わったぞ！！」

『マスター、お疲れ様です』

やっとの思いですばしっこく逃げるスフィアを全部破壊し終わった

「何で、途中から、素早くなったんだ？」

そう、最初はあまり早くなかったのだが後三個という所で動きが今までの比ではないぐらいに素早くなった

『マスター、申し訳ありません』

いきなりフレアが謝って来た

「何でフレアが謝るんだ？」

『えっと、あの・・・・・・』

言いよどむフレア、まさか・・・・・・・・!!!

「まさかフレア、お前・・・・・・・」

『申し訳ありません、マスターに無断で速度を上げてしまいました』

「やっぱりかー!!!なんか可笑しいと思ったんだよ!!途中からフレアが喋らなくなったと思ったらやっぱりか!!」

『申し訳ありません』

でも思いっきり怒れない!!だってきっと僕の事を思ってやった筈だから!!

「怒るわけ無いだろ?俺の為を思ってやってくれたんだろ?」

『はい、マスターを思って速度を上げました・・・・・・ボソッ（本当はただ管制をしてるのも退屈なので速度を上げただけですが）』

「うん、なんか言ったか?」

『い、いえ!!何も言ってません!!』

「なら、いいけど」

何か今暇だから速度を上げたって声が聞こえた気がするけど、気のせいだったか

「まぁいいや、このまま魔法訓練をするぞ！！」

『はい、それでは宙に浮く訓練をしましょう。空を自由に飛ぶにはまず宙に浮かなければなりません。宙に浮くイメージをもって受けなかったとしたら、空を飛ぶことは諦めなければいけません』

宙に浮くって・・・・・・

「宙に浮くって言ったって、どうやって浮いたらいいんだ？」

『宙に浮くにはまず、体中に魔力を廻らせて下さい』

「魔力を廻らす？」

『はい、まずは足から順に胴体、手、頭と順々に魔力を廻らせてください」

「でも、どうやって廻らせたらいいんだ？」

『そうですね・・・・・・、水を容器に注ぐように廻らせてみて下さい』

水を容器に注ぐようにか

「分かった、やってみる」

そう言うと、目を瞑りさっき言われたように魔力を水を容器に注ぐよう足から

順にに廻らす

すると体の中に何とも言えない感覚が体中を満たしていくのが分かる

『マスター、その調子です！！そのまま宙に浮くことをイメージしてください！』

「分かった！！」

宙に浮くのをイメージし、浮かべ！！と念じる

フワッ

「『あっ』」

瞑っていた目を開けると、少しだけだが地面から浮いていた

「やった、やったぞ！！俺は浮いてるぞ！！」

『やりましたねマスター！！凄いです、まさか一回で成功するなんて！！』

「よーし、このままの調子でいくぞ！！」

『はい！！』

〜〜三時間後〜〜

「う〜ん、痛いよ〜、苦しいよ〜」

「まったく、いくらきらとの魔力量がＳＳクラスだからといって無茶をしすぎです」

そう、魔力を使い過ぎたため倒れてしまいました

「う〜ん、何か天井に羽の生えたお姉さんが手招きしてる〜〜」

「きらと兄ちゃんアカン！！そのお姉さんに付いて行ったらアカン！！」

「・・・・・・ハッ！！僕は一体」

どうやら死に掛けていたようだ

「まったく、なんでフレアちゃんが止めなかったの？きらと君とユニゾンしてた
フレアちゃんならきらと君の限界が分かってたはずでしょう？」
「申し訳ありません、マスターが一回で宙に浮けた事に喜んでしまい、それで」
「言い訳は聞きません」
「はい・・・・・・」
フレアはシャマルさんに説教をされていた
「ほらよきらと、コレ食え」
ヴィータが近づいてきて、手に持っていた物を手渡した。見るとヴィータの大好きなバニラアイスだった
「いいのか？コレってヴィータの好きなアイスじゃないか」
「もう一つあるから気にすんな。それにきらとにはまだ借りを返せてなかったしよ」
「借り？」
「あたしらを家族として扱ってくれたお礼みたいなもんだ」
「はは、そんなことだったらいいのに」
「ウッセェ、騎士は借りを作らないもんなんだよ」

「そうなんだ。とりあえず直ったらどっか皆で遊びにいきませんか、シグナムさん」

「そうですね、きらとの体調が良くなったら遊びに行きましょう」

「ザフィーラさんも行きましょうね、それに教えて欲しい事もありますし」

狼形態でさっきから静かにしてるザフィーラさんに問いかける

「・・・・・教えて欲しい事ですか？」

「はい、２ｎｄフォームにトンファー形態を選んだので格闘訓練を少しつけてほしいんです」

「・・・・・うまく教えられるか分かりませんが、手解きしましょう」

「ありがとうございます」

この後いろいろ話し合い、海鳴市にある温泉旅館に止まりにいくことになった

第七話　～無茶のしすぎは良くないですね～（後書き）

～～あとがき～～

「きらと兄ちゃんにアホー！！（車椅子で突撃）」

「ゲラファ！！（きりもみしながら地面に激突）」

「兄ちゃんは無茶しすぎなんよ！！もし死んでもうたらどないするつもりや！！」

「ごめん、次からは気をつけるよ」

「落ち着けよはやて」

「落ち着いてられるかい！！」

「だったらさ、二度と無茶しないように躾けちゃえばいいんじゃねぇの？」

「ばっ、ヴィータ！！」

「せやな、二度と無茶できへんように躾けてしまえばええな」

「あ、ちょっとまって、あ、あ、あああぁぁぁあああああ！！！」

「・・・・・・きらと、あなたのことは忘れません」

「まて、ザフィーラ!!きらとはまだ死んでいないぞ?!」

「あとで治療しておかなきゃね」

〜〜感想とご質問、募集中です!!どしどし下さい!!〜〜

第八話　～海だ！祭りだ！夏休みだ！！前編～（前書き）

更新が遅れてすいません、新学期でいろいろあったため更新が遅れました
一気に時間軸を飛ばして夏からです。

第八話　～海だ！祭りだ！夏休みだ！！前編～

「いいいいいいいっやっほーーい！！海だー！！」

「うおおおおおおお！！！海やーー！！」

はい、ただいま八神家全員で海にきとりまーす！！！

前からはやてが海に行きたいといっていたので、海に行くことにしました！

「微笑ましい光景ね、シグナム」

「ああ、主はやてときらとがこんなにも喜んでいる。それだけでも私にとっては幸せだ」

砂浜にレジャーシートを敷き、パラソルを砂浜に差し休んでいるシグナムさんとシャマルさんが嬉しそうに話す

「なぁ、ザフィーラ」

「なんだ、ヴィータ」

「ザフィーラはさ、ずっと犬の「狼だ」・・・・・狼のままでいるのか？」

「ああ、今回はこのままの状態で主はやてときらとに着いていく」

「そうか、あたしもはやて達と遊ぶから着いてく」

「そうか」

「そうだ」

ヴィータとザフィーラさんは砂浜に座りながらそんなことを言っていた

シグナムさんとシャマルさんは、どちらもビキニで、腰にはセパレードを着けている。色は、シグナムさんが紫色で、シャマルさんが緑だ。そして二人の特徴は

その自己主張の激しい胸だ。さっきから見てたのだが男共がシグナムさん達をナンパしようとしては撃退されていた

僕はボクサータイプの水着で色は薄い赤色。はやてとヴィータは胸の部分を肩にかけるタイプで、色ははやてが白で、ヴィータが赤色である

「にしても海にこれてよかったなはやて。今までこれなかったから俺も嬉しいや」

「うん、私も海にこれんかったからうれしい。きらと兄ちゃん、今日は楽しい思い出をいっぱい作ろうな？」

「ああ、今日は遊びまくっていい思い出を作るぞー！！」

「おおー」

ちなみに、フレアはどうやら昨日風呂から上がった後に体をちゃんと拭くのを忘れていたらしく、湯冷めしてしまい、熱が九度二分でてしまった為、家で療養中だ

第八話　～海だ！祭りだ！夏休みだ！！前編～（後書き）

えっと、今回はこんなに短くてすみません。本当にすみません。
それと、ご感想、ご意見、バシバシ募集中です！！
次回は長くかけるように努力します

第九話　～海だ！祭りだ！夏休みだ！！中編～（前書き）

前回の続きです。最近、学校でいろいろあり、疲れたため更新が遅れてしまいました。
お楽しみいただければうれしいです

第九話　～海だ！祭りだ！夏休みだ！！中編～

「ところでシグナムさん」

「なんでしょうか、きらと」

少し遊びつかれたのでパラソルの下で休憩していたところ、遊びに行かずに荷物番をしているシグナムさんに聞いてみる

「シグナムさんて、泳げるんですか？」

「どうでしょう、今までの主はただ私達にリンカーコアの蒐集だけを命じてきたので、泳ぎ方を忘れているかもしれません」

「そうなんですか？」

「はい、今まで戦いの日々で私達は疲れきっていました。ヴィータに至っては他人を信じられず、ただ自分自身しか信じられない、そんな状態にまで陥っていました」

「そんなことが・・・・・・」

今のヴィータははやてとシャマルと一緒に顔に笑みを浮かべて遊んでいる。あの顔からはとてもじゃないがヴィータが疑心暗鬼に陥っていたとは思えない

「ですが主はやてときらと、貴方達に出会ってからヴィータは以前のように戻ってこれてきました。きっと主はやてときらとに出会っていなければヴィータは完全に壊れていました」

「そんな、ただ僕達は純粋にシグナムさん達を家族として迎えただけです。
そうですね、僕達がシグナムさん達を家族として向かえたのは一つだけ言えば」

「言えば？」

「・・・・・・ッ！！／／／／／／」

シグナムさんが顔を近づけて聞いてくる。シグナムさんの顔が近いことに顔が赤くなってくる

「きらと、どうしました？」

「い、いえ！！言えばですね、シグナムさん達がどこか辛そうな顔をしていたからですよ」

「辛そうな顔をしていた？」

「はい、シグナムさん達はどこか悲しそうで辛そうな雰囲気がしているんですよ。それにシグナムさん達の顔はもう人殺しをしたくない、そう物語っていたんですよ」

「私達は、そのような顔をしていましたか？」

シグナムさんが首を傾げて聞いてくる

「はい、自慢じゃないですけど僕は昔からその人の内面を見るのが

得意だったんですよ」

「内面、ですか？」

「はい、両親が死んでからは遺産目当てに僕たちを引き取ろうとする大人達ばかりでしたからね、そういう大人達を見極めるのに内面を見ようとしてたらいつしか得意になってたんですよ」

「ですが、中には純粋に引き取ろうとした者もいたのではないのですか？」

「はい、そういう人も確かにいました。ですけど、そういうのは必ず片方の人だけで、もう片方の人が遺産目当ての引取りだったんですよ」

「そうだったのですか」

「はい、今となってはいい思い出ですよ。ただ唯一我侭を言うとすれば・・・・・・」

「すればなんでしょう・・・・ッ！！」

シグナムさんが息を呑むのが分かった

「ただ唯一我侭を言うとすれば、父さんと母さんにもう一度会いたい」

目から涙が出てくるのが分かる。父さん、母さん、何で死んじゃったんだよ

「きらと！！」

ガバッ！！

「シ、シグナムさん？」

突然シグナムさんに抱きしめられた

「きらと、あなたが以前私達に言ってくれたことですが、泣きたい時には泣いてもいいのですよ？」

シグナムさんが優しく言い聞かせてくる

「シ、シグナム、さん・・・・・・」

「はい、何でしょうか？」

「僕は、泣いてもいいのでしょうか？」

「はい、私が泣いてるところを見られないようにこのまま抱きしめておきます

きらとは存分に泣いてください」

「うぅ、うう・・・うわぁぁぁぁぁぁ！！！」

「・・・・・・」

シグナムさんが背中を撫でてくれる。それだけでも涙がどんどん出てくる

「うわぁぁぁぁぁ！！」

父さん、母さん、天国でも元気にやっているでしょうか？僕とはやてはとても元気に過ごしています。つい最近新しい家族が四人もできました。ですので、安心して天国で見守っていてください

「すみません、シグナムさん。見っとも無い所を見せてしまって」

人が沢山いる前で、それも女の人に抱きしめられながら泣くという事に顔が赤くなるのがわかる

「いえ、私達四人がきらとと主はやてから受けている恩に比べたら大した事ではありません」

「はは、シグナムさん、僕らも遊びましょうか」

「はい」

そういってはやて達と合流するため、走った

「おーい、はやてー」

「お、きらと兄ちゃんきたんか？」

「おう、みんなと遊ぼうと思ってな」

「はい、私もきらとに誘われてきました」

「せやか、んなら皆で遊ぼうか～」

「はい♪」

「「おおー」」

「「はい」」

「ということで、チームで分かれて泳ぎの競争をしようと思います」

突然の提案に皆が目を白黒させる

「あの、きらと、少しいいですか？」

「はい、なんですか？」

「泳ぎの競争はいいのですが、それでは主はやてが泳げないのでは・・・・・」

「大丈夫ですよ、シグナムさん。俺がそこまで考えてないとでも思

いましたか？」

「それじゃ、どうやってはやてが参加するんだよ」

「それはだな、はやてにはこれを使ってもらう！！」

そう言ってどこからとも泣く取り出したのは、全自動推進型浮輪車椅子ｖｅｒだ

「・・・・・・一体どこからだしたんですか？」

「それは、禁則事項だ」

某未来人の台詞を借りる

「それで？その全自動なんとかをどうするんだよ？」

「さっきも言ったけど、はやてにはこれを使って競争をしてもらう」

「こんなバランスの悪そうなのに乗って大丈夫なのかよ？」

ヴィータがごもっともな事を聞いてくる

「これはな、ついこの間知り合いになった天才発明家の人に作ってもらったから大丈夫だ」

「胡散臭ぇなおい」

「きっと大丈夫さ！！では、チーム分けをしよう！！チーム分けはアミダくじで決める」

そういって砂場に線を引き、網状にする。一番右から僕、はやて、シグナムさん、シャマルさん、ヴィータ、ザフィーラさんと名前を書き、下にも同じように名前を書いていく

「それじゃ、いっきまーす！！ふんふんふーん♪」

鼻歌を歌いながら網を辿って行く、結果！！

「決定しました！第一チーム、シグナムさん&ヴィータチーム！！」

「ヴィータ、お前と同じ組か」

「おう、宜しく頼む」

「続いて第二チーム、ザフィーラさん&はやてチーム！！」

「ザフィーラ、よろしゅう頼むな」

「はい、必ずや主に勝利を」

「そして最後は！！シャマルさん&きらとチーム！！」

「きらとくん、よろしくお願いしますね♪」

「はい！！」

それぞれのチームが決まったところで・・・・・・

「それじゃ、それぞれ誰が最初に泳ぐかきめてくださーい」

そういってそれぞれがそれぞれの場所に移って、泳ぐ順番を決めあう

「それではシャマルさん、どちらが先に泳ぎますか？」

「そうね～、私はあまり泳ぎが得意じゃないから先に泳がせてもらえるかしら？」

「そうなんですか？意外なんですけど」

「あら、そうかしら？人には得意不得意の一つや二つあるものなのでしょう？」

「あはは、そうですね、確かにそうです。それじゃ先にシャマルさんが泳いで僕が後で泳ぐ、それでいいですね？」

「はい♪」

シャマルさんはとてもいい笑顔でそう言った

でも、まさかあんなことになるなんて思いもよらなかったんだ・・・・・・

第九話　～海だ！祭りだ！夏休みだ！！中編～（後書き）

～あとがきコーナー～

「え～、ここで皆さんにお知らせがあります」

「どうしたんやきらと兄ちゃん、突然改まって」

「ああ、実を言うとな、この話の作者が感想がぜんぜん来なくて寂しいらしいんだわ。
だからバシバシ感想あげてくれ」

「作者よ、それはひとえに貴様の執筆能力のなさのせいだ」

【グサッ！！】

「ん、なんか今変な音聞こえへんかった？」

「いや、何も聞いてないけど？」

「私も聞いていません」

「まぁいいや、とりあえず今回はこれでおしまい！！」

「次回を楽しみにしとってや～！！」

「「「さよなら！！！」」」

第十話　～海だ！祭りだ！夏休みだ！！後編～

「ところで、シャマルさん」

「何かしら、きらと君」

「これからどうします？」

「うん、本当にどうしようかしら」

只今絶賛漂着！！そう、波に攫われ無人島に漂着してしまった！

「どうします？シャマルさん、デバイスを置いてきてしまったんですよね？」

「はい、こういう時ぐらいはデバイスを置いて皆で遊ぼうってシグナム達と話し合いましたから」

「う～ん、僕もフレアがいないと基本的な事すらも満足に出来ませんからね。どうしますか・・・・・・」

う～ん、う～ん、本当にどうしよう・・・・・・

「しょうがない、とりあえず助けがくることを信じてここでサバイバルでもしますか？」

「？？サバイバルって？」

ああ、シャマルさんは意味を知らないのか。何故かシグナムさんは

知ってたけど

「サバイバルって言うのは、僕も詳しくは知りませんけど簡単に言えば食料等は
全部現地調達で生き残る技術ですね。例えば回りに満足に食料がない時は
シャマルさんはどうしますか？」

「私？そうね・・・・・、魔法でサーチして食べられるものを探すかしらね」

「魔法が使えない時はどうしますか？」

「私ドジだから、毒とか入ってるの判らずに食べちゃうかもね」

「はぁ、とりあえずそういった毒の無さそうな物を探して採って食べる、それが助けが来るまでこうします。
僕が食料を調達してくるので、シャマルさんはこの辺りに落ちている木の枝を集めて置いてください」

「え、でもそれだときらと君が危なくないかしら？私もついていったほうがいいんじゃ・・・」

そういうシャマルさんの前に手を持っていき、その先を言わせない

「大丈夫ですよ、こういう時の為にサバイバル技術を習っておいたんですから、大丈夫ですよ」

「どういうときの為なのよ」

と、ため息を付かれてしまった

「それ以前に誰にサバイバル技術を習ったんですか？」

「えっとですね、確かずっと前にコロンビアにはやてと一緒に誘拐されたときに「ちょっと待ってください！！」なんですか？」

説明しているところをシャマルさんに止められた

「誘拐って、一体何があったんですか！？」

慌てた様に聞いてくる

「確かあれは、父さんたちが死んでから一週間たったときぐらいですかね？その時に知らない男たちに誘拐されてしまったんですよ。その時にころにコロンビアにある島、サンヒエロニモ半島に連れられてたんですよ」

「・・・・・・」

シャマルさんは口を上げて唖然としている

「それで、人体実験をされそうになった時にコードネームがスネークって呼ばれてる人に助けられました」

「コードネームがスネーク？」

「はい、その人は戦闘のプロだったようで周りにいる研究者達を一瞬で倒して、僕達を助けてくれたんですよ」

「それで、その後は何があったんですか？」
「助けられた僕達はその人を家に招いたんです」
「いや、ちょっと待ってください」
「またですか？」
「今度はどうやって帰ったんですか？ほかの国に行くのに必要なパスポート？ももっていないようですし」
「それならそのスネークが偽造で作ってくれました」
「それって犯罪じゃないですか！！」
「大丈夫ですよ、スネークが言ってました」
「何てですか？」
シャマルさんが恐る恐る聞いてくる
「スネーク曰く『生き残るためにはばれなきゃ何をやってもいい。だが人殺しはいけない』ってね」
「それってなんだかもういい事を言ってるのか悪いことを言ってるのか判りません！！」
「まぁ、まぁ、落ち着いて。それでその時にサバイバル技術やＣＱＣを教わりました」

「ＣＱＣって何ですか？」

「ＣＱＣって言うのは、スネークの父さんとその師匠が開発した対人専用の格闘技術だそうです。それのお陰で今まで何とか身を守ってこれました」

「きらと君、いろいろすごい人生を送っているんですね・・・・・・」

シャマルさんが、どこか遠い目をしながらいった

「と言う事で僕は大丈夫なのでシャマルさんは木の枝を集めていてください」

「はぁ、判りました。私が木の枝を集めます！？」

シャマルさんはそういってどこか行ってしまった

「あっ、まぁいいや。とりあえず食料を探さなきゃな」

僕もその場を離れ、食料を探すために自然が生い茂る森に入っていった

ガサッ！！ガサガサッ！！

食料にあたる木の実や蛇、蛙を求めて森を探す。けど雑草が生い茂

っていてなかなか見つからない

「食料を見つけなきゃシャマルさんに申し訳ない。とにかく見つけなきゃ」

腰にはさっき拾った木で作った木製ナイフと木製の弓矢を引っさげている

ま、どっちみち使えるか判らないけど・・・・・・

「とりあえず木に登ってみるか」

手近にあった木に手を掛け、木に登る

「うんしょ、うんしょ、うんしょ・・・・・・ふぅ、やっと上れた」

木に登って辺りを見渡してようやく島の全景が見れた

「結構大きいんだな、この島。えっと、食料が取れそうな木っと」

目の上に手を水平にかざし、近くをぐるっと見ると、バナナに似た果物が見えた

「あれに決定！！」

そう言うと、木から降りバナナ？に向かって歩いた

しばらくすると目標が見えた

「あれはちょっと高いな、しょうがないまだ使いたくなかったけど使うか」

腰に掛けてあった弓矢をとり、弓に矢を番える

ギリギリと限界まで引き絞り、根元に狙いを定める

「えいっ！！」

掛け声とも着かない声を出しながら、矢を放す。放たれた矢は根元に向かって

一直線に飛び、当たる

矢が当たったバナナ？は重力に逆らわず地面に落ちる

「やた！！＼（＾。＾）／」

万歳をし喜ぶ。ひとしきり喜んだ後はバナナ？を紐で腰に括り付ける

その後は急いでその場を離れて、集合地点に砂浜に急いだ

「意外な収穫だったな～」

砂浜に着き、砂浜に座りながらとってきた獲物の成果を見る

バナナ？　十本

蛇　　五匹

兎　　五匹

と、たぶん二人分の食料が取れた。きっとこれだけあれば二日は持つだろう

「えっと、シャマルさんはっと」

シャマルさんを探すが辺りにはいない

「（シャマルさん、今どこにいますか？）」

「（あ、きらとくん、結構木の枝を集めたんだけど、多すぎて全部もてないのよ。
だから、今から来て手伝ってくれるかしら？）」

どんだけ集めたんだよ、シャマルさん・・・・・・（遠い目をしながら）

「（判りました、それじゃ何処にいますか？）」

「（えっとですね、きらと君がいる場所から南西に一キロ行った所です）」

「（今から向かいますので、そこから動かないでくださいね）」

「（はい♪）」

そう言うと急いでシャマルさんのいる所に向かった

〜〜十分後〜〜

シャマルさんがいるであろう場所に行くと、そこには山のごとく詰まれた枝があった

「・・・シャマルさん、これなんですか？」

「何って、木の枝よ？」

「木の枝なのは判ってるんです！！聞きたいのは何でこんなに積んであるのかって事ですよ！！」

「え～と、ちょっとむしゃくしゃしてそれで集めてたらこんなになっちゃったてへっ♪」

「てへっ♪じゃありませんよ！どうするんですかこれ！！」

「む～」

「頬を膨らませたって駄目です！（危うく許しかけてしまうところだった！）」

「判ったわよ～、この中から数本持ってきます～」

いけねっ、ちょっと拗ねちゃったみたいだ。それにしてもシャマルさん

子供っぽいところもあるんだなー

「それじゃ、僕が十本持っていきますので、シャマルさんは五本お願いします」

「はい♪」

なんか知らないけど、機嫌が直ったみたいだ

集合地点に戻るころにはすっかり暗くなってしまった

急いで枝をくべて火をおこすために木の板を棒で擦り、摩擦熱で火種を起こす

火種が起きた後は急いで木に移し、火を大きくさせる

火が完璧に大きくなる間、とってきた兎と蛇を習ったとおりに捌いていく

その光景がシャマルさんには少し刺激が多すぎたようで、終始目を背けていた。

「シャマルさん、御免なさい」

兎を捌きながら謝る

「？なんできらと君が謝るんですか？」

謝ると、こちらに顔をむけ、シャマルさんは首を傾げながら聞いてくる

「だって、僕が泳ぎで競争なんて言わなかったらこんなことにはならなかったですし」

「いいんですよ、きらと君は悪くありません」

「でもっ！！」

「それ以前に、ちゃんと泳げなかった私が悪いんです」

「違います、僕が悪いんです！！」

「私です！！」

「僕！！」

「私！！

「「・・・・・・プッ！！アハハハハハハハ！！」」

何故かおかしくて思いっきり大声で笑いあった（その間にも、ちゃんと兎は捌く）

捌き終わった肉を血抜きし、木の棒に刺し焼いていく

「それにしても、救助は来るんでしょうか？」

両手に二本ずつ棒を持ち、焼きながらシャマルさんに聞く

「なんでそんなことを聞くんですか？」

シャマルさんは体育座りし、焼いてる様子を見ながら聞き返してくる

「だって、ここがどこかも判らないんですから、何時助けがくるかなんてわかりません。それにしても失敗したな、もしフレアがいたら結界を張ってシグナムさん達に居場所を知らせることが出来るのに」

「そうですね・・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・・」

「「あぁ！！」」

そうだ、そうだよ！！何で忘れてたんだろう！！

「「念話が使えるんだから、念話で位置を知らせれば！！」」

シャマルさんも思い至ったようだ！！

「それじゃ急いで位置を知らせましょう！！」

「はい！！」

その後念話で位置を特定したシグナムさん達が助けに来て、無事救助された

第十話　～海だ！祭りだ！夏休みだ！！後編～（後書き）

～～あとがき～～

「いや~、大変だったなー」

「そうね～、まさか大波に攫われるなんて」

「いや、なんであんた等はそんなに笑っとれるんや！？」

「いや～、だってね～」

「はい」

「「なかなか味わえない経験だったし」」

「だからって！？」

「はい、今回はここまでーす」

「ご意見、ご感想ドンドンお待ちしてます！！」

「次回でまたお会いしましょう！」

「私の事は無視か！！って、ちょっ！！」

「「「さよなら！！」」」

「いろいろ大変だった」

「ああ」

「そうだな」

第十一話　～修行再開です！！～（前書き）

更新が遅れてすみません
テストなどがあり、更新が遅れてしまいました
これからは、月に2～3回のペースで更新できるように頑張ります
！

第十一話　～修行再開です！！～

今僕とシグナムさんは、以前修業した公園に来ている

「ではきらと、今日より修業を再開します」

「は～い」

最近は海に行ったり、祭に行ったりと遊び尽くしだったため鈍った身体を直す意味も込めて、修業をする

「ではまず、素振り３００回からやってみましょう」

「はい！！」

この間、武具屋で買ってきた木刀を前に構える

「開始！！」

シグナムさんの合図で素振りを開始する

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、……」

久々に振ってみて判った。

身体が前より動かない。肘の関節が降る度に軽く痛む。

「シグナム、さんは、やらなくて、いいん、ですか？」

手を休めずシグナムさんに聞いてみる。

途切れ途切れだったからちゃんと聞こえてるか心配だ

「そうですね……、私もやりましょう。
きらとがやっているの見ていたら身体を動かしたくなってきました」

シグナムさんも木刀を構え、同じ様に振る

「むっ」

「どうし、ました、シグナム、さん」

「いえ、以前より、少しばかり、身体が鈍って、いるようです」

シグナムさんも身体が鈍っているようだ

この後はお互い一言も話さず、終わるまで木刀を振っていた

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……、ふぅ」

「お疲れ様です、きらと」

驚いた、まさか最後に修業をした時より体力が落ちているなんて

「以前より体力が落ちているようです。これからは毎日走り込みましょう」

な、なんだって―！！（エコー効果＆ａｍｐ；棒読み）

「流石に、毎日は辛いですよ。何回かやったら一日二日休んで、また何回かやる。
そういう方がいいんですけど……」

「……、考えておきましょう」

あっ、絶対あの顔は考えない顔だよ

「次は、実際に私と戦ってみましょう」

「えぇ！！いきなりですか！？
い、いきなり戦うなんて、無理ですよ！！」

「大丈夫です、きらと。
それに、この国にはこういう時に使う言葉があるそうです」

何か非常に嫌な予感……

「な、なんですか」

恐る恐る聞いてみる

「確か……、習うより慣れよ、でしたか」

シグナムさんが、今まで見たことないぐらい良い笑顔を浮かべながら、木刀を構えた。

「うう～」

今逆らったら痛い目を合そうなので、木刀を構える

「では早速いかせて貰います！！」

「！？」

その一言と共に一気に近づき、木刀を振り下ろして来る

咄嗟に防御するが、余りの重さに手が痺れる

「～～！！」

口から悲鳴にならない悲鳴が漏れる

「ふっ！！」

痺れを堪えていると、横から胴を刈る様に木刀を振って来る

「うぉ！！」

咄嗟に後ろに跳んで避ける。

ブォッ！！

風切り音を聞いてゾクッとする

もし、例え木刀だとしても、当たっていたらどうなっていたんだろう。

その事を考えただけで、寒気がしてくる

「よそ見している暇はありませんよ！！」

「うわぁ！！」

考え事をしている隙に、木刀に攻撃を加えられ、持っていた木刀が吹き飛ぶ

「ま、参りました」

両手を上に上げて、降参の意を示す

「いいですか、きらと。今回は練習でしたのでこれだけですみましたが、もしこれが実戦だったら、貴方は命を落としていたかもしれません」

その事を言われてはっとなる

そうだ、もしこれが実戦だったら・・・・・、考えただけでも寒気がしてきた

「つ、次からは余所見をしないよう頑張ります」

「よろしいです、では再開しましょう」

「はい！」

その後は、試合を何回かし家に帰った

「今日も疲れました」

「確かに、私も少々疲れました」

修行も終わり、今は家に帰っている途中だ

「そうだ、シグナムさん」

「何でしょうか？」

「はやて達のお土産に、ケーキを買っていきませんか？」

「ケーキ、ですか？」

「はい、最近僕達は修行ばっかりではやてといる時間が少ないですし、それのお詫び変わりに買って行きません？」

「そうですね、確かに私ときらとは最近修行ばかりで主はやてにかまっていませんでした」

「それじゃ、早速買いに行きましょう！いい場所を知っているんです」

「ここです、ここ！」

そう言って着いたのは、喫茶「翠屋」。ここのケーキや紅茶は美味しいと評判らしい。それに、店長夫妻も異様に若いと噂が・・・・・・

「なかなかいいお店ですね。外見も綺麗ですし」

シグナムさん、貴方は何処の評論家ですか？

とりあえず今の発言はスルーし、店の中に入る

「いらっしゃいませ！」

店に入ると、僕と同じくらいの女の子が出てきた

「えっと、お持ち帰りなんですけど・・・・・」

「何にしますか？」

「それじゃ、ケーキを六つとシュークリームを六つお願いします」

「はい、少々お待ち下さい！」

女の子が店の奥に消える。ふと、シグナムさんの顔を見ると、少しだけ怖い顔をしていた

「し、シグナムさん？」

「ん、なんでしょうかきらと」

「怖い顔をして、どうしたんですか？」

言うと、シグナムさんは驚いた顔をして

「怖い顔をしてましたか？」

「はい、最初にあった時みたいになんか怖かったです」

「すみません、今の少女から膨大な魔力を感じたものですから」

「膨大な魔力・・・・・ですか？」

「はい、それもただ無放出ではなくしっかりと纏った魔力です。おそらく彼女もデバイスを持っているかと」

へ～、この町には僕のほかにもいたんだ

そんな事を話していると

「お待たせしました！ケーキ六つとシュークリーム六つです！」

出来たらしい

「お会計は？」

「えっと、１２００です！」

「そんなに安いんですか？」
「はい、今日は安売りの日なんです！」
喫茶店にも安売りの日なんてあるんだ
「えっと、はい１２００円」
「ちょうどお預かりします！」
お金を渡し、荷物を受け取る
「ありがとうございました！」
その声をバックに店をでた

「シグナムさん、唐突ですけど一ついいですか？」
「何でしょうか？」
「シグナムさんの初代の主はどんな人だったんですか？」
「・・・・・・・・・・・・・」
初代主の事を聞くと、シグナムさんは黙ってしまう
「何か、不味い事でしたか？」

「いえ、ただ・・・・・・」

「ただ？」

「思い出せないのです」

「思い・・・・出せない？」

「はい、初代主がどんなお方でどんな性格だったか、どんな姿をしてたか、すべてを思い出せないのです」

「ですが、唯一覚えているとしたら・・・・・・」

「覚えているとしたら？」

「初代主は、今の主はやての様に家族の温もりというのを教えてくれました」

「よかったですね」

「はい・・・・・・」

その後は、お互い黙ったまま家に帰り、みんなでシュークリームとケーキを美味しく頂きました

第十一話　～修行再開です！！～（後書き）

後書きのようなもの

き「おい、何だよ→のタイトルは？」

は「これはなきらと兄ちゃん、作者が今好きなアニメのＯＰの題名をもじったものなんよ」

シ「作者の浅はかさがしれますね」

ウッ！

ザ「何か今聞こえませんでしたか？」

ヴ「さぁな、あたしは何も聞いてねぇぞ」

き「僕も聞いてませんよ」

は「私もや」

き「そんな事より、今回の更新が遅れてしまい本当にすみません」

は「次からは、こないなことがあらへんよう気をつけるさかい、ゆるしてな？」

き「んじゃ、次回でまた会いましょう！」

六人「さよなら！！！」

フ「マスター、酷いです。私を忘れるなんて・・・・・・」

六人「あっ！」

第十二話　～変革～（前書き）

一部原作と台詞などが違いますがおきになさらずに

第十二話　～変革～

「シグナムさん達、遅いな～」

「せやな、シャマルはどこ行ったかしっとる？」

「いえ、私は何も・・・・・・」

シャマルさんの歯切れが悪い、何か知ってるのだろうか？

「ま、とりあえずご飯でも作ってまってようか」

「せやな、よし早速つくろか」

「あ、私も手伝います！」

「「シャマル（さん）は何もしなくていい（せんでええ！）！」」

「二人とも酷いです・・・・・・」

シャマルさんが何か行ってた気がするが、無視だ！！

ご飯をひとどおり作り終わり、シグナムさん達が帰ってくるのを待つが、いつまでたっても帰ってこない

「！」

「シャマルさん？」

シャマルさんの顔が驚愕に染まっている、何かあったのだろうか？

「シャマルさん、どうしました？」

「え、あ、はい、あの用事ができたのでちょっと出てきますね」

「そうなんか、気をつけてな～」

「はい、いってきまーす」

それだけを言うと、シャマルさんは何処かに行ってしまった

「どうしたんだろ、シャマルさん。フレアは何か判る？」

ソファーに座っているフレアに聞く

「・・・・・・・・・」

「フレア？」

おかしい、フレアから返答がこない

「フレア？」

「・・・・・・ボソボソボソ」

「ん？」

フレアが何か言っている、よーく耳を済ませて聞いてみると・・・・・

「やっとやっとますたーにはなしかけてもらえたさいきんのますたーはしゅぎょうとかいろいろようじがあってはなしかけてもらえなかったけどやっとはなしかけてもらえたつぎもしはなしかけられずそのままほっとかれたらますたーをこうそくしてにどどわたしをわすれられないようにしましょうふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

（要訳：やっと、やっとマスターに話しかけてもらえた。最近のマスターは修行とかいろいろな用事があって話しかけてもらえなかったけ、やっと話しかけてもらえた。次もし話しかけられずそのままほっとかれたらマスターを拘束して二度と私を忘れられないようにしましょう、ふふふふふふふふふふふふふふふ）

怖！なにこの子拘束するとか物騒な事言ってるの！？マスターにとっては驚愕と共に恐怖が芽生えてくるよ！

「おい、フレア！しっかりしろ！！」

フレアの肩を掴み、前後に揺らす

「ふふふふふふふふふふふふふふふふ・・・・・・はっ！私は一体・・・・」

よかったフレアが正気に戻ったみたいだ

これからは成るべく話しかけるようにしよう

「フレアはシグナムさん達がどこにいったか判るか？」

「いいえ、私には判りません」

「そうか・・・・・・」

ま、いいや、その内帰ってくるだろう

それにしても、さっきからなんか変な感じがするけど何なんだろう？

「なかなかやるな」

「あなたも」

「もしも敵対していなかったらお互いいい好敵手になっていただろう」

「はい」

「だが、我等が主とその兄の為、負ける訳にはいかんのだ！！」

シグナムがレヴァンティンを構え、突進する

「はぁぁ！」

金髪の少女ーーーフェイト・テスタロッサも同じくバルディッシュを構え突進する

紫と金の閃光がぶつかり、そこに立っていたのは・・・・・・

「いい勝負だった」

シグナムだった

「Ｚｚｚ・・・・Ｚｚｚ・・・・Ｚｚｚ」

はやては寝てしまったらしい

車椅子から体を持ち上げ、ソファーに寝かせ、風を引かないように布をかける

「所でさ、フレア」

「何でしょうかきらと？」

「さっきから何かがぶつかってる様な感じがするんだけど・・・・・、何かな？」

「少し待ってください」

フレアは頭に手を当てて、何かを探るように目と閉じる

暫くし目を開ける。

「どうやら近くの市街地で誰かが結界を発生させ、戦っているようです」

「結界？何でそんな所で・・・・・・」

「判りません、見てきますのでマスターはここにいてください」

フレアはリビングから出て行こうとする

「いかなくていいよ、フレア」

フレアの腕を掴み、引き止める。

「何故ですかマスター？もしかしたらシグナム達に何かあったのでは無いでしょうか？」

「シグナムさん達ならきっと大丈夫だよ。皆強いんだから」

「ですが・・・」

「フレア」

「・・・・・・ハァ、判りました。行かないことにします。」

フレアは観念したのか、行かないみたいだ

「とりあえず、夜食作るからフレア手伝ってくれるかな？」

「判りました」

フレアと共にシグナムさん達の為に夜食を作るため、キッチンに向かった

〜〜〜暫くして〜〜〜

ガチャッ

「只今帰りました」

シグナムさん達が帰ってきたみたいだ。

「お帰りなさい、遅かったですね？」

「きっきらと？どうしましたか？」

シグナムさん含むヴィータ達が引きつった顔でこちらを見てくる。いったいどうしたのかな〜？（怒）

「別に何もありませんよ、ただはやてを心配させた罰にお仕置きしようなんて考えてませんよ？」

「考えてるじゃねぇか！！」

「問答無用！！」

『アァァァァ！！』

八神家にて、ヴォルケンズの悲鳴が響きわたった

番外編　～ある日の日常～　前編

朝７：００

「朝に飲むコーヒーは美味しいな～」

大人ぶって朝からコーヒーを飲む。

「なに大人ぶってんねん、砂糖大量にぶっこんだ甘々コーヒーの癖に」

はやてが横から余計な事を言う

「はやても同じ様なもんだろ」

「なに言うてんねん、私は普通に砂糖なしでコーヒー飲めるで」

「言ったな」

「言うたで」

「だったらこの苦いコーヒーを飲んでみろ！」

そう言ってはやての前にコーヒーを溢さないようにドンッと置く

「飲んでやろうやないか！」

そういってはやてもコーヒーの入ったカップを持ち、一気に飲む

「ブー！！」

飲みこんだコーヒーを女性にあるまじき顔をしながら
一気に吐き出す
勿論お盆で吐き出されたコーヒーをは徹底防御だ

「ちょ、熱！！めっちゃ熱！！」

引っかかったな！悪戯用にすごい熱いコーヒーをついどいたんだ！！

「フハハハハハハ！！！馬鹿め！！！」

馬鹿にしながらはやてを思い切り笑う。

「この、仕返しや！！」

「へっ？」

間抜けな声がでた次の瞬間、顔に黒い液体を掛けられた。
なにを掛けられたか理解するのに数秒かかった、これははやてが
飲んでいたコーヒーだ
理解した瞬間、顔に物凄い熱量がきた

「ぎにゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

変な声が出るとともに椅子から転げ落ちる。てかまじ
熱いんですけどぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！

「私を嘗めるからや！」

その日の朝は僕の悲鳴をＢＧＭにはやての笑い声が家中に響き渡った

朝９：００

あれからなんとか落ち着き、椅子に座っている

はやてはシグナムさん、シャマルさんと一緒に散歩に出ている。

ヴィータはゲートボールにザフィーラさんは散歩にでている

かくいう僕は趣味の人形作りをしている

「・・・・・・・・・・」

黙々と作業をする。髪の毛ははこうで、服はこうして・・・・・

「できた！」

完成した人形を机の上に置く。

それは、金色の髪をツインテールにして全長約３０?ぐらい、服装は赤を

中心として黒のレースがあるゴスロリ調の服を着ている

「ここまで作るのに苦労した～～」

机に突っ伏し、今までの苦労を思い返す。

材料集めに始まり、作り方、周囲の誤解、色々あったな～・・・・・

思い返していると

ツンツン、ツンツン

何かつつかれてるきがする

気のせいだろな～そう思って無視してると

「お父様、起きて」

なにやら聞きなれない声がする

「お父様、おきて」

誰だろう、そう思い机から離れ顔をあげ当たりを見渡す

「キョロ、キョロ・・・・」

右、左、上、下を確認するが誰もいない

「お父様、ここです」

声のするほうに視線を向けると

「やっと気づいてくれた・・・・」

僕が作った人形が喋っていた

「あ～・・うん、きっとこれは夢だ。今朝はやてにやられたから
きっと変な夢をみてるんだ。うん、そうに違いない」
「お父様、これは夢じゃありません」
儚い想いを壊すように目の前に鎮座している人形はそういった
「ダアァァァァァァ！！何で人形が喋ってるんだよォォォォォォォォォ！！！」
床に膝を突き、頭を抱えあらん限りの声で叫ぶ
「お父様、耳が痛いので少し声を抑えてください」
冷静に人形が注意する
「いやいや何で人形が喋ってるの？おかしいよね！？普通は喋らないよ！？」
「だってお父様が作ったんですもの、皆喋りますわ」
「はい？」
この言葉を聞いて目が点になる。僕が作ったから喋るし動く？
「ごめん、少し待って」
喋る人形を放置して、急いで簡単な人形を作成する
～～十分後～～

目の前の現状に頭を抱える

「〜〜〜〜♪」

急いで作った小型の人形が凄く嬉しそうに飛んでる。なんかもう嫌だ

朝　１０：００

どうやら作った人形が動くのは特殊な力らしい。実際この人形達も魔力を流さなければ動かないらしい。

一体を残して

「でっ、何で君は動いているの？」

何処からか出したのか高そうなティーカップで紅茶を飲んでいる娘？に動けるのか聞く

「だってお父様、作るときに私に魔力を込めてましたもの。半永久的に動くの」

「魔力を込めてた？待ってよ、僕は魔力を込めて作ってないよ」

そう、僕は魔力を込めて作ってなんていない

「それは無意識の内に魔力を込めていたからよ」

「無意識の内に？」

なにそれ、怖い

「私も驚いたわ、まさか無意識の内に魔力を込めて作っていたなんて」

うん、僕も驚いたからね

「お父様って、規格外？チート？」

「どっちもちがぁぁぁぁぁぁあああうぅぅぅぅぅぅ！！！」

大声で叫んでしまった僕は全然悪くないと思う

～後編に続く～

番外編　～ある日の日常～　前編（後書き）

～あとがきのようなもの～

今回は大変更新が遅れてしまいもうしわけありません
ここ最近いろいろあったため遅れてしまいました
こんな駄作者でもよければこれからもよろしくお願いします
ちなみに、最初の人形と二番目の人形のモデルは
ローゼンメイデンの真紅（最初）と、東方Ｐｒｏｊｅｃｔの上海人形です

番外編　～ある日の日常～　後編（前書き）

遅れました、なぜか最近調子が悪いんです（T＿T）

番外編　～ある日の日常～　後編

昼　１０：３０

あれから暫くの間、頭を抱え込み床を転げまわっていたきらとは、今は落ち着き、ソファーに座っていた

「ハァ、ハァ、、ハァ・・・・」

「大丈夫、お父様？」

原因は私何にも悪くありませんとでも言うかの様に話している

「ああ、大丈夫だよ真紅」

とりあえず、気にしないことにし、真紅の頭を撫でるきらと。

「～～～♪／／／／」

顔を紅くする真紅。そしてきらとは勿論それに気付かない。

「え～と、今は・・・・」

時計を確認すると、今が１０：３０だと気付き、立ち上がり、玄関に向かう。

「お父様？どこに向かうの？」

その後ろを真紅は宙に浮きながら、付いてくる。

「いやさ、そろそろ昼ご飯と、夜ご飯の買い物してくるから、真紅は留守番な？」

「私もいっては駄目？」

首をかしげ聞いてくる

「・・・・まぁ、とにかく真紅は留守番な」

きらとはそう言うと真紅の頭に手を乗せ、くしゃくしゃと撫でる。撫でられている真紅は顔を少し赤らめ、嬉しそうに

「判りましたわ、お父様。その代わり、何かお土産を買ってきてくださいな」

その言葉にきらとは、『中々やるな～』と内心思っていた。

「判ったよ、ちゃんと留守番してたらね」

最後にまた頭を撫で、玄関の扉を閉め、外を見る。

外は風がビュービューと吹き、とても寒い。

「さむっ・・・・・・・」

ブルブルと身体が震える。震える身体を温めるように自分の身体を抱きしめ、今朝の天気予報を思い出す。

「確か、今年三番目の寒さだって言ってたな・・・」

っと、呟きながら、もっと厚着すればよかったと内心後悔しながら、スーパーに向かい、足を進めた。

１０：５０

「着いた・・・・・・」

寒さのせいで足が重く、いつもなら１０分で着く距離のスーパーが、２０分も掛かってしまった。

「さっさと済ませてシャマルさん達を迎えに行こう・・・」

一人そんな事を呟きながら、スーパーに入り籠を取り、今日の昼食と夕食のメニューを考えながら、野菜コーナーを見る。

「何が安いかな・・・・・」

見て回りながら、安い狙い目の物を探すが、どれも中々高く、安い品物が見つからない。

「ん～～・・・・」

どうするか考えていたその時

ピ～ンポ～ンパ～ンポ～ン・・・

店のお知らせの合図が入る。

「何だろう・・」

野菜を見ながら耳は放送に傾ける。

『只今より、野菜詰め放題を開始します。袋の中に入りきれば、たったの５００円！！詰め放題は野菜コーナー東にて開催します！！』

ピ～ンポ～ンパ～ンポ～ン・・・

「なん・・・だと・・・？」

きらとはこの放送に耳を疑う。何故ならこのスーパーで、きらとが知る限り、今まで詰め放題といったイベント事は行われたことは無いのだ。

「・・・・・・」

きらとは、ここで詰め放題に参加すべきかしないべきか迷う。詰め放題に行けば昼食と夕食のおかずが一気に手に入る、行かなければ手に入らない。

きらとが出した答えは・・・・・・

「急ごう！！」

参加することに決まっていた様だ

「すごい・・・・・・」

放送で言っていた野菜コーナー東に行くと、そこには歴戦(主婦)の戦士達が大勢いた

『うぉぉぉぉぉぉ！！』

『邪魔じゃボケェ！！』

『これは私のもんじゃぁぁぁぁ！！！」

そこかしこから歴戦(主婦)の戦士の怒声が聞こえてきた

「急がなきゃ・・・！」

負けていられないと、きらとも集団に突撃するが・・・

「グヌヌヌヌ・・・・・」

だが戦士(主婦)達の織り成す壁は厚く、９歳であるきらとには入る隙間が無い。

「（どうしよう・・・・・、こうなったら！）」

きらとは手に持っていた籠を放棄し、集団の足元をしゃがんで詰め放題コーナーの最前線に向かう

「きつ・・い・・・・！」

ぎゅうぎゅう犇めき合う足に潰されそうになりながらも、段々近づいていく。

「つい・・・た・・・・！！」

コーナーの棚の前に立ち、棚を見てみる。

「やばっ、急がなきゃ！」

野菜を置かれている棚には野菜の数が少なく、今にも無くなりそうになっている。

それをみるやきらとは急いで袋を取り、中に野菜を詰めていく。

詰めているのは、人参、葱、じゃが芋、キャベツ、レタスだ。

「入・・・・・・れ・・・・・！！」

袋の口をぎゅっと閉める。ぎりぎりだが、何とか袋を閉じることが出来た。

「よし、後は・・・・・」

後ろを見れば相変わらず戦士(主婦)達が犇めいている

「よし」

来た時と同じようにしゃがみ込み、抜ける

「アイタタタ・・・・・・」

途中、手を踏まれたりし、掌を怪我したきらと。

「けどこれで何とか足りるな」

籠の中には先ほどの詰め放題の袋に肉類、魚介類等が入っている。勿論、ヴィータ専用のバニラアイスを買うのを忘れない。

きらとの様子はまるで、大きな仕事を終えたかのような感じに見えた。

１１：２０

あの後、スーパーを出た後きらとは、昼食の為に皆を呼びに行く事にした。

「え～と、シグナムさんは剣の道場、はやてとフレア、シャマルさんとザフィーラさんは散歩ついでに図書館に行ってて。ヴィータは近所のおじいちゃん達とゲートボールと・・・・」

ちなみに、わざわざ歩いて呼びに行かなくとも念話を使い呼べばいいのだが、残念ながらきらとは念話の使い方を知らない、もとい教えて貰っていないので歩いて行くしかないのだ。

「とりあえずヴィータからにするか」

買い物袋の中にはアイスもあるので、急いでいかなければ溶けてしまう。

『溶けてればヴィー他のどやされるだろうな～・・・・』

そんな事を考えながら、いつもゲートボールがやっているであろう場所に向かい歩き始めた。

１１：３０

「つっ、着いた・・・・・」

公園の入り口に着き、息を整える。いつもなら直ぐ着くのだが生憎寒さと買い物袋の重さで大幅に遅れてしまった。

「えっとヴィータは・・・・」

あたりを見渡し、ヴィータを探す。すると、公園の端にあったベンチに見慣れた髪型と服を着ている人物を見つけた。

「いたいた、お～い、ヴィータ～～～！！」

空いている手を振りながら、ヴィータを呼ぶ。ヴィータはベンチに座り、飲み物（コーラ）を飲んでいた。

「ん～～、きらとじゃあねぇか。どうしたんだ？」

きらとが呼ぶと気が着いたのか、きらとに話しかけながらきらとに向かい歩いてくる。

「いやね、そろそろお昼ごはんの時間だから呼びに来たんだよ」

「もうそんな時間なのか？」

「うん、ほら・・・・・」

「んっ・・・・？」

きらとが指を指した方にはよく公園などにある時計があり、時計の針は１１：３６を指していた。

「ホントだ・・・・」

「だからさ、荷物運び手伝ってほしいんだけど・・・」

そう言って、二つある内の一つを持ち上げ、ヴィータに見せる。

「メンドクセェから嫌だ」

きらとの予想通りの返答をいうヴィータ。

「やれやれ、それじゃこれはいいのかな？」

そう言って、袋の中に手を突っ込み、ひとつの物体を取り出す。

「そっそれは・・・・！！」

「そう、期間限定超有名店「フランルーフ」完全監修売り切れ御免の幻のアイス、「フラムルージュ」さ！！」

「何だって・・！！！」

きらとが取り出したのは、超有名店が監修したアイス、フラムルージュだ。

「これが欲しくないのかな～？」

ヴィータの目の前で右に左とアイスを揺らす

「グヌヌヌヌ・・・・」

腕に釣られ、顔を右に左にと振る。

「ヴィータはやる気が無いみたいだから、はやてにあげる「待て！アタシがやるから！」」

「（作戦通り）」

きらとは、その一言を待っていたと言わんばかりに、即座にヴィータの両手に買い物袋を持たせ、瞬時に図書館に向けて走った。

背後から「まて、この野郎！！」という声が聞こえたが、気にしないきらとであった。

ちなみに、無事に皆を呼び終わり、家に帰ったきらとは、ヴィータによって粛清されたのであった

第十三話　～争いを知らない日常～

「なぁなぁはやて」

「なんやきらと兄ちゃん」

「思った事一つ言っていいか」

「ええよ」

「何で、何で僕は女装してるんだよーー！！！！！！！」

上を見上げてきらとが思い切り叫ぶ。今の彼の格好はミニスカートにどこかで見たような
黒を基調とし、赤の装飾が入ったブレザーを着ている。

「えっ、だってこの前夜遅くにきらと兄ちゃんが叫んだんが悪いんや」

「だからって（パシャッ）あっ撮るな！」

痴態（きらとはそう思っている）が写っているデジカメを奪い取ろうときらとは
手を伸ばすが、なぜか奪い取れない。

「このっ、このっ！！」

「取れるものならとってみぃ！」

はやては風の様にさらさらと腕を動かし、カメラを取らせない。

「畜生！！はやての・・・・・綺麗で可愛い自慢の妹～～！！」

きらとは、はやての悪口を言おうとしたが見つからず、結局賛辞を送っただけで玄関に向かう。

「何かお土産頼むな～」

そんな声をバックに、扉を思い切り開けどこかに行ってしまった。

~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

「こんな格好のままで出てきちゃったけど、これから何処に行こう・・・・」

あの後、きらとは少し離れた公園のベンチに座っていた。

「あむっ・・・・・結構美味しいな、たいやきチーズ味・・・」

そして、常人には考えられないような味のたいやきを食べていた。
その味は、たいやきの風味など微塵も感じられず、感じるのはチーズのまるで鉄の様な味だけがする。それを、きらとは笑顔で食べていた。

「これから・・・・・そうだ・・・」

念話を開き、フレアに話しかける。

（フレア？聞こえる、フレア？）

（何でしょうかマスター？）

（今何処に入るかな？）

（今は図書館に入ます）

珍しい、きらとはそう思った。フレアは普段あまり遠出はせず、家の半径一kまでしか移動しないからだ。

（まぁいいや、家から少し離れてる公園に来てくれるかな？）

（？何故でしょうか。）

（ちょっと離れられない事情があるんだよ）

（はぁ・・・判りました。向かいますので少しの間待っていて下さい）

（頼むよ～）

念話を切り、フレアが来るのを待つ。

「さて、継ぎ足しで買ってこよう、チーズ味」

また一般の人（一部除く）が食べない味を買いに車販売のたいやき屋に歩いていった。

〜〜〜十分後〜〜〜

「マスター、お待たせしました。」

「ほほ、ふぃふぁふぁふへは（おお、来たかフレア）」

きらとがたいやき（チーズ味）をまた食べていると、フレアがゆっくりとした足取りで来た。

「いったいどうし・・・・！！」

フレアはきらとの近くまで歩き、そこでやっと気付く。きらとが女装をしている事に・・・・

「フレア・・・・？」

「カ・・・・ぃ」

「へっ・・・・・」

フレアが何か言うが聞き取れない。もう一度聞きなおす。

「か・・・い・・・・す」

「かいす？」

またもう一度聞きなおす。

「可愛いです。マスター！！」

「へっ、きゃあ！！」

突然フレアに抱きつかれ、きらとは女の子みたいな悲鳴を上げる。

「可愛すぎです、マスタ～！」

「やっやめ・・！！」

必死に離れようともがくが、悲しいかな成人と子供とでは力の差は歴然。更に力を込められ抱きしめられる始末だ。

「あ～もう～駄目！可愛すぎです！！」

「わっぷ！」

フレアはきらとを抱え込むように抱きしめる。位置は胸部、きらとの顔はフレアの大きい胸に嵌り、息が上手く出来ない状態である。

「ん～～！ん～～！」

「♪」

きらとの悲鳴空しくフレアは気付かず、余計に埋めていく

「・・・・・・・・・」

「・・・あれ？マスター？」

ここに来て気付くフレアは気付く。きらとの身体に力が入っていないことに・・

「ああ、マスター！！しっかり！！」

「キュ～～～～・・・・・・」

見事に気絶していた。

ちなみに、きらとが気付いたのは天国の様な地獄の様な時間を味わってから約三十分後だった。

「死ぬかと思った・・・・・」

きらとはベンチに座り、一息ついている。右手に午後ティー、左手にたいやき（チーズ味）を持っていた。

「すみません、マスター。」

フレアはその隣でしゅんと項垂れ、沈んでいる。見る人には犬の尻尾と耳がたれているのが判るはずだ。

「まぁいいよ、フレアも悪気が無いのはわかってるし・・・。」

とっ言いつつもきらとは先ほどのことを思い出す。

”まさか、あそこまで性格が変わるとは・・・・。これからはフレアの前で女装しないようにしよう。”

驚きと共に、そう硬く決心するのであった。

「マスター？」

「いや、何でもないよフレア」

“今はゆったりとしたこの時間を楽しもう”そう思いながらフレアと談笑をするのであった。

近い内にこの平和が崩れるとは知らずに・・・・・・

ちなみに、お土産を買わずにフレアと共に家に帰ったきらとは、はやてによって更なる女装をされる羽目になったそうな

第十三話　～争いを知らない日常～（後書き）

久々の更新です、遅れてしまい申し訳ありません。
今回出たきらとの女装ですが、リトバス！の女子の制服をイメージしていただけたらなと思います。

第十四話　～争いの日常～

とある無人世界、その砂漠上空にある人物が騎士甲冑を身に纏い、浮いていた。
その人物は、「烈火の将」シグナム。
彼女、ひいては彼女達は主であるはやてを救う為、闇の書を復活させる為リンカーコアの魔力を集めていた。

「・・・・・・」

シグナムは目蓋を閉じ、考え事をしていた。それは一度に蒐集できる魔力についてだ。
こういった無人世界などにいる魔法生物から蒐集できる魔力は、多くて精々２ページ分だけだ。
だが、一般の魔道士ならば個人差があるが、一気に１０～５０ページは一気に蒐集できる。
それも、前回ヴィータが戦った少女――――高町なのは――――の魔力量レベルなら１００ページは蒐集できる。

「管理局の魔道士が現れるまでは魔法生物から蒐集するしかないか・・・」

ふぅと溜め息を一つ吐き、砂漠から魔法生物が現れるのを待つ。

『シグナム』

その時、ヴィータから念話で通信があった。

『どうした、ヴィータ』

『あのさ、もしこの事をきらとが知ったらなんて思うんだろうな・・・』

『それは・・・・・・』

言葉が詰まる。はやて同様きらともシグナム達を家族とし、シグナム達をとても信頼している。
だが、もしもきらとがこの事を知ったら?その事を想像するのも憚れる。
その事ははやてについても同様だ。きっと・・・いやはやては必ず悲しむだろう。
きらとの場合、シグナム達の行為に幻滅し、離れていくだろう。
そう思うだけでも、心の内に暗闇が広がっていくのをシグナムは感じ寒気を感じた。

『きっと、我等に幻滅するだろうな』

『幻滅か・・・・』

シグナムの一言にヴィータの言葉が沈む。ヴィータもその事を想像したのだ。

『今は、リンカーコアを蒐集する事に集中するぞ』

『ああ・・』

シグナムの言葉にヴィータは返事をするが、その声にはまだ影を帯びていた。

『・・・・・・念話を切るぞ』

そう言い、念話を切り魔法生物が現れるのを待つ。

―――ヴォォォォォォォォォ！！！！！！！！―――

「来たか・・・・・・」

シグナムのちょうど足元、そこに砂色をした巨大な鯨型の魔法生物が現れる。

「主はやての為、倒させて貰う！！！」

レヴァンティンを鞘から引き抜き、構え鯨型の魔獣に突撃する。

―――バァアアアアアアアア・・・・・・！！！―――

突撃してくるシグナムに気付いたのか、魔獣は砂を思い切り吸い込み、そして・・・

―――ヴォォォォォォォォ！！！！―――

一直線に、まるでレーザー光線の様に砂をシグナムに向け思い切り吐き出す。

「クッ・・！！」

右に回転するように避ける。

「中々厄介だな・・・」

そういい自分の右肩を見る。右肩の部分が弾け飛び、肩が露出し僅かだが血も滲み出ていた。

「だが・・・！！」

再度剣を構え突撃する。先ほどの突撃よりも速度がある。

――――ヴァァァァァァ！！！！――――

シグナムが目と鼻の先まで来た時、魔獣は顔だけを潜らせ尻尾をシグナムに向けて振るう。

ブゥンッ！！

「フッ・・・！！」

尻尾のひ鰭の部分をレヴァンティンで切り裂く。鰭は豆腐を切る様に簡単に切れ、切れた部分からは緑色の血液が溢れ出ていた。

――――ヴォヴォオオオオオ！！！！――――

尻尾を切り裂かれた事による怒りか、魔獣の体皮が砂色から赤色に変わる。

――――ヴォォォォォォォォォォォ――――

先ほどの砂のレーザーが、今度はタイムラグ無しで放たれる。

「チィッ・・・！！」

シグナムの口から自然と舌打ちが漏れる。当たる直前。

『―Ｐａｎｚｅｒｇｅｉｓｔ（パンツァーガイスト）』

Ｐａｎｚｅｒｇｅｉｓｔ（パンツァーガイスト）でぎりぎり防御する事に成功する。

「カートリッジ、ロード！！」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ（エクスプロズィオーン）』

レヴァンティンからその音声が発せられると共に、カートリッジが三発リロードされる。

そしてシグナムはレヴァンティンを腰溜めに構える。

「紫電・一閃！！」

同時に一気に接近し、炎を纏ったを斬激を魔獣に切りかかる！！

――ヴォ・・ヴォ・・・・――

魔獣はその声と共に力なく崩れ落ちる。

「ふぅ・・・」

シグナムはゆっくりと砂漠に降り立ち、魔獣に近づく。

「すまないな、これも主はやての為なのだ。」

魔獣からリンカーコアを蒐集し、空を見上げる。

「これでやっと1ページ分か・・・」

そして目を閉じ、シグナムはその世界から姿を消した。

第十四話　～争いの日常～（後書き）

どうでしたでしょうか？
今一先頭描写がうまく出来ません（泣）
これからも頑張っていきますので応援宜しくお願い致します。

オリキャラ紹介（前書き）

はい、この辺りで今更かもしれませんが、オリキャラの紹介をしたいと思います。

オリキャラ紹介

『クラス』魔道士
『真名』八神きらと
『性別』男性
『属性』善、調和、愛
筋力：C
魔力：A＋＋
耐久：B
幸運：A＋＋
敏捷：A＋＋
宝具：なし

ユニゾン時
筋力：A＋
魔力：EX
耐久：A＋
幸運：EX
敏捷：EX
宝具：なし

能力：人形作成（A＋）長年培ってきた技術。人形作りなら誰にも負けることは無い。
人形士（A＋＋）人形をどれだけ操れるか。この領域に行けば操れぬものなど無い。
黄金律（B）人生において、どれだけ金が付いて回るか。この領域なら、一般人の三倍は金が回る。
声真似（EX）他人の声を真似る技量。真似できないモノはない。

備考：八神はやての双子の兄（その出生には実は秘密がある）で両親が死んでからは足の動かないはやてと一緒に暮らしてきた。
家族を傷つけるものは誰だって許さない

『クラス』ユニゾンデバイス
『真名』フレア
『性別』女性
『属性』冷静、調和、愛
筋力：C
魔力：A
耐久：D
幸運：A
敏捷：A＋＋
宝具：無し
能力
読顔術（EX）：相手の顔を見るだけで、何を考えているか判る。
この領域なら判らぬ事は無い。
融合（ユニゾン）：対象と融合（ユニゾン）するする

オリキャラ紹介（後書き）

どうでしょう、
多少無理がありますが、Ｆａｔｅ風にしてみました。

デバイス形態説明（前書き）

前回の補足のようなものです。

デバイス形態説明

１ｓｔＦｏｒｍ～ホウマノツルギ～
説明：刃は片方にだけにあり、刀に似ている。色は全体的に赤く刀身の裏には羽のような炎の様な形状をしている。
大きさは約１ｍ７０ｃｍできらとが持つには大きすぎるが重さを感じさせず、まるで羽を持っているかの様に錯覚させる。
全体的に電気を帯びており、対象に切り付けると陽炎の様な物が立ち上る。
カートリッジ６個

２ｎｄＦｏｒｍ～ファントム＆ペイン
説明：黒白対になるハンドガン型のデバイス。
銃口の下にアンカー射出口があり、いざという時に他の物体にアンカーを射出し、自身を引き寄せる事によって避ける事ができる。
それぞれ側面に、右に（ファントム）Ｐｈａｎｔｏｍと、左と（ｐａｎｅ）刻印がほってある。
色々改造がしてあり、そのお陰で重量が約２０ｋｇになってしまい補助魔法無しでは持ちきれない。その代わり打撃武器としても扱える。
カートリッジ両方とも２０個

３ｒｄＦｏｒｍ～ツインオニキス～
両刃の剣で、真中の所に持ち手がある。詳しくはフリージングのサテライザー＝エル＝ブリジットの武器を想像して欲しい。

色は全体的にオニキスだが、一部装飾でＤｉｅ　Ｎｉｅｄｅｒｌａｇｅ　ｗｉｒｄ　ｎｉｃｈｔ　ｅｒｌａｕｂｔ，　ｕｎｄ　ｎｕｒ　Ｓｉｅｇ　ｗｉｒｄ　ｅｒｌａｕｂｔ（意味：敗北は許されず、勝利しか許されない）と、白で書かれている。
速さに特化した剣で、スピード強化の魔法が付加されている。
大きさは約１ｍ２０ｃｍとなっている。
カートリッジ８個

第十五話　～会議～

「う～ん・・・」

椅子に座り、ある事を考える。

「どうしましたか、マスター？」

目の前の椅子に座り、お茶を飲んでいたフレアが話しかけてくる。

「いやさ技名を考えてたんだよ。」

「技名・・・ですか？」

「うん、シグナムさんは『紫電・一閃』ヴィータは『テートリヒシュラーク』って名前があるでしょ？だからさ考えとこうと思って」

「そうですか・・・・・・」

何故だろう、フレアの僕を見る目が何だか可哀相な人を見る目になってる気がする。

「まぁ、いいや。実際にやって決めようか。」

「それが一番良いでしょう。」

「転移お願いするよ。」

「判りました。」

フレアがそう返事をすると、足元に魔方陣が現れ視界が光に覆われた。

気が着くと、一面砂漠に覆われた世界に来ていた

「こんな世界があったんだ・・・」
「先程サーチしましたら、この世界に人はいないようです。」
「俗に言う無人世界って事？」
「そうなります。」

無人世界か・・・

「なら早速やろうか。」
「はい、判りました。」
『ユニゾン・イン』

掛け声と共に騎士甲冑を身に纏う。デザインは前のから変え全体的に赤を中心としたデザインで、所々に黒色の装飾がありそれなりに格好いいデザインだと思う。
（作者から：判らない方は神姫シリーズの騎士型・サイフォスの赤と黒ｖｅｒ．をイメージして頂けたら嬉しいです。）

「それじゃとりあえず・・・」

地面から十ｍくらい飛び、地上に大型の標的スフィアを設置する。

「フレア、準備はいい？」
『いつでも大丈夫です』
「いくよ！！」

身を縮めながら力を溜めるようにし、標的スフィアに向けて飛ぶ。

「せいやーー！！」

掛け声と共に全身に炎？を身に纏い、スフィアに突撃し、破壊した。

「う～ん、この技どう思う？」

『・・・・・・』

「あの、フレア？」

『・・・・・・』

何度呼びかけてもフレアから返事が無い。どうしたんだろう？

『マスター、さすがに之は名前の付けようがありません』

「本当に？」

『いくらなんでも全身に炎をまとってキックをするのは・・・』

そんなに変かな？

「まぁいいや、とりあえず技名を・・・・・・」

顎に手を当て考える・・・・・・。

「・・・・・思いつかない（汗）」

『マスター（汗）』

どうするか・・・・・・

ドドドドドドドドドドドドッ！！

「何だ！」

『マスター、ここから約５００ｍ離れた位置に複数の反応があります。

これは・・・、そのうち二人の反応がヴィータ、ザフィーラです。』

「なっ・・・！」

何で二人が！？

『その他複数の反応は判りません。』

「とっとりあえず行かなきゃ！！」

自分なりに早い速度で急ぎ、二人の下に向かった

第十五話　～会議～（後書き）

中途半端なところで終わってしまい申し訳有りません。
ここで今回でた技の名前を募集します。
締め切りは3月3日までです。
応募まってます！

更新停止

ものすごく今更ですが、暫くの間更新を停止させて頂きます。
なぜかといいますと、ＩＳの二次小説の執筆に集中したいのと、なのはをもう一度振り返り、勉強しようと思っているからです。
ですので、この小説を読んでいただいた皆様には大変申し訳なく思っています。
また再開しましたら応援を宜しくお願いします。

以下字数稼ぎ
栄えたる響き、光となれ許されざるものを封印の輪に、ジュエルシード封印
リリカルマジカル。封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード封印
リリカルマジカル。ジュエルシードシリアル～封印

我、使命をうけしものなり。契約のもとその力を解き放て
風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に
この手に魔法を！レイジングハートセットアップ

第十六話　～襲撃～（前書き）

久々の更新です。この話ではきらと君が大変な目に・・・！

第十六話　～襲撃～

とある管理外世界にある砂漠。そこでヴィータとザフィーラは謎の敵と戦っていた。

「くそっ！！なんなんだよお前は！！」

「クッ・・・」

二人とも体中に傷があり、バリアジャケットもいたるところが破れていた。

「悪いが、その質問には答えられないねぇ・・・。」

声から察するにその敵は女の様だ。女の姿はこの砂漠には異質な全身黒尽くめのバリアジャケットを身に纏い、顔には黒く目の所が赤い仮面を着けている為表情は伺えない。ヴィータ達がボロボロに対し、女は無傷だった。

だが、声色から察するに女はヴィータ達を馬鹿にしているのが見えた。

「テメェ・・・！」

「待て・・ヴィータ！！」

その事が判ったのか、ザフィーラが止めるのを構わずヴィータはアイゼンを腰溜めに構え、自身が持てる速さで女に向かう。

「オリャアァアアアア！！」

自身の攻撃範囲に近づいたところでヴィータはアイゼンを思い切り振りかぶる、思い切り振り下ろす。

「駄目なんだよなぁ・・・。」

女は退屈そうに一つ息を吐くと、片手で手に持っていた大剣で簡単にヴィータの攻撃を防御する。

「まだまだアァアアア！！」

ガンッ！ゴンッ！！ドゴンッ！！

そこからさらに全力でアイゼンで殴りつけるが、女はいつまでも涼しい顔で攻撃を受け止めていた。

「だから、駄目なんだ・・・って！！」

ギィンッ！！

「うわぁあああ！！」

「ヴィータ！」

攻撃が大剣に当たった瞬間に大剣を前に押し出しヴィータを弾き飛ばす。砂地に着地する直前にザフィーがギリギリヴィータを抱きとめる。

「おい、ちゃんちゃら遊んでねェでさっさとトドメさしやがれェ。」

さっきまで後ろで闘いを見ていた女がそこで始めて口を開きそういった。

その声色には何処か狂気を感じさせる。

「まだだ、ターゲットが来るまではこうしておびき寄せなきゃ成らんのよ。」

「チッ、メンドクセェなァ・・・」

その二人の様子をヴィータとザフィーラは念話で会話しながら見ていた。

『おい、ザフィーラ！！なんなんだよアイツらは！』

『俺にも判らん・・・。だが判っているのは奴らは誰かを誘き寄せようとしている事だけだ』

『おびき寄せるって・・・一体誰を！？』

「誰をおびき寄せるのか、知りたいのかい？」

「「！！」」

念話を傍受された事に二人は驚く。大剣を構えた女は二人の驚いた様子に喉の奥をクックックッと鳴らしまるで愉快だと言わんばかりにこう言い放った。

「私達の目的は、八神きらと、そしてそのユニゾンデバイスだ。」

「「！！！！」」

そこでさらに衝撃が走る。奴らの狙いが自分達が守らなければいけない存在の一人だったからだ。

「何できらととフレアを狙うんだ、テメェらは！！」

ヴィータがそう食って掛かるが、女は別段気にした風も無くこう言

った。

「八神きらとには凄い力が眠っている。その証拠にお前が言っていたフレアとユニゾンできた事が証明だ。」

「はぁ？なに言ってんだよ！ユニゾンデバイスは融合率が高ければ誰だって出来るだろうが！！」

「だが、あのユニゾンデバイスは違うんだよなぁ・・・」

やれやれといった具合に頭をゆっくりと振ると

「アレはどんな奴とユニゾンしようとしても必ず融合事故が起きて、マスターを必ず殺すんだよぉ」

「はぁ！？だったら何できらとは大丈夫なんだよ！？」

「だから奴が欲しいんだよ。アイツを徹底的に調べ上げりゃあきっともっと凄い事がわかる！？ああ、その事を考えただけで体がぞくぞくする・・・」

女は何処か狂ったように自身を抱きしめると、顔を俯かせ体を震わせる。

「この、変態野郎！！」

ヴィータは再びアイゼンを構えると、一気に近づきアイゼンを振り下ろすが・・

キンッ！！

「このボケ女ァ、何悦に浸ってんだよォ」

後ろでずっと見ていたもう一人の女がいつの間にか起動していた双剣(デバイス)で受け止めていた。

「それに、ターゲットが近づいてきてんぞォ」

「それは、好都合だよ・・・！」

二人はかなたを見る、それにつられてヴィータ達も見るとその方向には、きらとがこちらに向かってきていた。

ＳＩＤＥきらと

「（何なんだよ、あの反応は！？）」

きらとは焦っていた。ヴィータとザフィーラの二人がいるであろう方向で、自身に見覚えのない魔力反応があったからだ。

『きらと、十時の方向距離８００ｃｍです』

「そっちに反応が？」

『はい、確実です。』

「そうか」

飛翔を続けながらもきらとは考える。何で二人がこの世界に？そもそも何故戦っている？そんな考えが頭の中をグルグルと駆け巡る。

『！！！』

「？フレア・・・？」

突然相棒であるフレアが何かに驚いたのを察知したのかきらとは、問いかける。するとフレアは何回か言い淀みそして・・・

『今気付きました。この魔力反応は以前私が捕まっていた研究所にいた魔導師の反応です・・・・・・。』

「えっ・・・」

その事にきらとは驚く。

「とういう事は・・・・・・」

『はい、必然と魔導師ランクは・・・S＋となります』

「なっ！」

もう言葉が出なかった。魔力量ではこちらが勝っているが、実力では向こうが上なのだ。きらとの頭の中では自分が負ける映像がチラついていた。

『ですが、私は二人の戦闘パターンをある程度解析済みです。現時点ではある程度は接戦できるはずです』

「本当かい？」

『はい、私に任せてください。』

「信頼してるよ」

そう言うと念話を切り、飛翔に集中する。

『接敵（アプローチ）します』

「・・・・・・」

眼前に見えて光景は、ヴィータ達はボロボロだが、謎の敵は無傷で

疲れている様子はまったく無い。

「ヴィータ！ザフィーラさん！！」

きらとはヴィータ達の近くに降り立ち、駆け寄る。

「きらと！？何で此処にいるんだよ！？」

「それはこっちの台詞だよ！」

『マスター、今はそれよりも・・・』

フレアに言われ、きらとは前を向く。そこには全身黒尽くめのバリアジャケットを展開した女が二人いた。一人は大剣、一人は双剣型のデバイスを展開していた。

それを見ると、きらとは武装を２ｎｄＦｏｒｍに変更し、銃を両手に持つ。

「へぇ・・・」

それを見ると、大剣を持った女はまるで感心するように驚いたような、そんな声を上げきらとを見る。

「二人をこれ以上やらせない！！」

双銃を構え、敵を見据える。その姿だけは一流の銃士を思わせた。

「へぇ、格好だけはさまになってるじゃねぇか・・・」

大剣使いは、大剣を肩に担ぐ要領で構える。

「お前たちは誰なんだ！！」

きらとは、警戒しながらも声を張り上げ聞く。その声色には若干の恐怖が感じ取れた。もしかしたら自分は殺されるのでは？という考えが頭の中をグルグルと駆け巡る。

「私等か？私らは、広域犯罪組織『時空の音』だ」

「時空の・・・音・・・」

「よーく覚えときな・・・。まぁ、覚えてる暇なんてないんだけどなぁ・・・！」

「！！」

女の姿が一瞬で消える。きらとは驚き慌てて周囲を見渡すが何処にも見当たらない。視界の端に何故か
バインドで束縛されているヴィータとザフィーラが目に入ったのは気にしない事にした。

『マスター！！後ろです！！』

「くっ！！」

咄嗟に後ろを向くと、大剣を振り下ろしている女がいた。きらとは慌てて双銃を顔の前で交差させ、斬撃に備える。

ガギンッ！！

「〜〜〜！！」

「ほぉ・・・」

斬撃を何とか防ぐが手に痺れが奔る。女は防いだ事に感心していた。

「くそっ！！」

銃を前にやり、大剣を押しやる。女は何てことないと言う風に空中で後方に一回転しながら下がる。

「アレを防ぐかい・・・、中々楽しめそうじゃないかい・・・」

女は体を震わせると、大剣を腰溜めに構え・・・

「ほらほら、どんどん行くよ!!!」

足を一歩踏み出すと、一瞬でトップスピードに移行しきらとの前に現れる。

「はやっ・・・!」

咄嗟に右手の銃で魔力弾を三発撃つが、弾道を見極められ身を捩るだけで交わされる。

「チートか・・よ・・!!」

後ろに下がりながら、呟く。

「逃げてると勝てないよ!!」

腰溜めの状態から横に薙ぎ払う。

ブォンッ!!

「うぉっ!!」

しゃがむ事で避けるが・・・

「下方に注意・・・ってね！！」

ヒュッ！

勢いのついたトゥキックがきらとの顔面に放たれる。しゃがんだ直後で体が硬直しているきらとには避けるすべがない。

ドゴッ！！

「アグッ！！」

蹴りは頬に当たる。くぐもった小さな悲鳴をあげ、３ｍ吹き飛ばされる。

「あぁ・・！ぎぃ・・！！！」

きらとは頬を抑えながらのたうち回る。今まで感じた事の無い痛みが体中を走る。

「その苦痛に歪む表情・・・いいわぁ・・・」

女は恍惚とした表情をしながらきらとに近寄る。

「ハッ・・ハッ・・ハッ・・・」

きらとは顔を今日に歪ませながら後ずさりする。女の顔に恐怖を覚えながらこの状況をどう打開するか

考える。

『フレア！何か手はない！！』

念話でフレアに助けを求める。

『それでしたら、一か八かの手が一つだけあります。』

『何？』

『敵に接近し、そこで自爆覚悟の魔法を使えばあるいわ・・・』

『自爆・・・・・・』

自爆の事を考える。フレアの言う通り自爆覚悟の魔法を使えば倒せるかもしれない。だが

自爆のリスクは？自分はどのくらいのダメージを受けるのか？その事を考えると自爆に対する恐怖心が

どんどん湧き上がってくる。

『安心してください、マスター。』

『フレア・・・』

フレアからそういわれ、恐怖心が少し和らぐ。

『マスターが攻撃する瞬間、私がマスターの回りに魔法障壁を全力展開します。』

『した場合、どうなる？』

『全力展開した場合、約５０％の確立で対したダメージもなくできます。』

『そうか・・・』

きらとは恐怖で震える足を一回殴り、ゆっくりと立ち上がる。

「私に捕まる気になったのかい・・・？」

女は少し警戒しながらきらとに問いかける。

「まさか・・・、そんな訳ないよ・・・。」

きらとは魔力を足に、腕に、双銃にとゆっくりとそれでいて大量に込めていく。

「まぁ、何をやったって無駄なんだけどさぁ・・・」

『あいつは油断してる・・・フレア、今此処で使える最善の攻撃魔法は！』

『検索・・・。でました、炎塵雀火です。』

『炎塵雀火か・・・。それでいくぞ！！』

『分かりました・・・』

きらとは２ｎｄＦｏｒｍから３ｒｄＦｏｒｍに変更し、両刃を両手で構える。

「いくよ・・・！！」

瞬間的に足に魔力を送り、走るスピードを上げる。デバイスに掛かっている速度強化もあいまってとてつもない速さになる。

「はぁっ！！」

その状態から、飛び上がりフレアを斜めに構え突撃する。

「きたきた・・・！」

女は大剣を前に構え、防御の構えを見せる。

「炎塵・・・雀火！！」

大剣にフレアが当たった瞬間、刃に魔力を通し瞬間的に炎を上げさせる。そして・・・

ドンッ！！！

フレアと女を巻き込み、爆炎がまった。

きらとＳＩＤＥ　ＥＮＤ

ヴィータＳＩＤＥ　ＳＴＡＲＴ

「んー！！んんーー！！」

ヴィータとザフィーラは戦闘が始まる直前、女の片割れによってバインドで身動きを封じられた。

そして今、目の前できらとと女が爆発に巻き込まれる瞬間を見る。

『おい！！きらとは無事なのかよ！！』

口にもバインドが掛けられているため話せない、その為念話でザフィーラに聞く。

『俺にも判らん・・・、今は無事な事を祈ろう』

『くっ・・！』

何も出来ない自分が情けない、ヴィータの頭の中でそんな言葉がグルグルと駆け巡る。
そして、段々と煙が晴れていく。

「んーーー！（一体どっちが！）」

ヴィータとザフィーラはきらとが立っている事を願う。そして、完全に煙が晴れた時、立っていたのは・・・

「危なかったなぁ・・・」

女だった。きらとは顔を足で踏みつけられ倒れ伏していた。

「んんんー！！（きらとー！！）」
「デアトート、ターゲットを回収した。帰るよ。」

どうやらバインドで拘束したほうの名前はデアトートというらしい。
デアトートはゆっくりと女に近づく。

「アンアック、あいつらはどうするんだァ？」

デアトートは女（アンアック）にそう言うと、ヴィータとザフィーラを指差す。

「ほっておけばいいさぁ、それにターゲットの捕縛には成功したんだしぃ」
「そうかよォ、つまんねェなァ・・・」

デアトートはそう言うと、地面に転がっているきらとを肩に担ぐと転移魔法を起動させ、どこかに転移した。

「・・・・・・」

「んんんんーーーー！！！！（ちくしょーーーー！！！！）」

その場には、ヴィータの叫び声だけが響いていた。

第十六話　～襲撃～（後書き）

いかがでしたでしょうか？
次回では一気に話が飛びます。おいおいきらと君のその後の話を書きたいと思います。

第十七話　～闇の書～

第九十七管理外世界～地球～

そこでは、闇の書の管制人格（マスタープログラム）となのは達の戦いが行われていた。
なのは達は悲しみの連鎖を止める為、管制人格（マスタープログラム）は主の願いを叶える為戦う。
その両者の戦いを遠くで見る二つの影があった。

～海上空から、１０ｍ地点～

「いいかい、チャンスがきたらあそこにいる黒い奴と戦うんだ。」
「・・・・・・はい」

ビルの屋上に二つの影があった。一人は黒いバリアジャケットを身に纏い仮面をつけた女、もう一人は全身を黒いローブで覆っているため分からない。
だが声は男性のもののため、少年と断定できる。

「いい返事だ、もしアレを殺れたならご褒美をあげるよ。」

女はとても愉快そうに、だが顔は笑わずにそう少年の耳元で囁く

「・・・・・・・！！」

少年は数瞬したあと体を震わせ、少し喜んだように見えた。
その様子を見ると女は仮面の中でニヤッと笑うと、仮面をゆっくりと外した。
女の正体はきらとを誘拐した組織『時空の空』の首魁、『アンアッ

ク』だった。

「そろそろ、出番になりそうだよ。自分に自己強化魔法を掛けときな」

アンアックの言う通り、なのは達の戦いは変化を見せていた。フェイトが管制人格に突撃し、吸収されるところだった。

「ほら、行って来なよ」

「・・・・・・はい」

そうい言ってローブの少年はビルから飛び降り、管制人格の所に飛ぶ。飛ぶ時にめくれたローブから見えたのは一きらと一の顔だった・・・。

管制人格（マスタープログラム）は泣いていた。何時終わるとも叶わない永遠の悪夢を続けなければ成らないからだ。

今回の主は今までの主と違い、守護騎士達を家族として扱ってくれとても大事にしていた。だがそれももう終わりだ。

主の友だと思っていたものが、守護騎士達を倒し蒐集させたからだ。

そしてその者の片方を吸収し、あと一人を吸収すればまた終わる・・・。

そう思っていたときだ、背後から誰かが接近してくるのが分かった。

咄嗟に振り向きシールドを張ると同時にシールドに誰かが攻撃をしてくる。

その者はローブを身に纏っていた。

「・・・・・・これを止めるか・・・・・・・」

きらとは攻撃を止められたことに対して別に驚きもせず、ただあるがままの現実を受け入れていた。

「お前は誰だ・・・？」

管制人格はシールドで防御した状態でそう聞く。

「・・・・・・君には関係ないさ」

きらとは管制人格の問いにそう答えると、空中でバックステップし管制人格を見据える。

「そうか、ならばお前は邪魔な存在なだけだ・・・」

一瞬悲しそうな顔をすると、右手を前にやり

「咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。・・・」

管制人格は守護騎士が蒐集した高町なのはのリンカーコアより会得したスターライトブレイカーを詠唱する。

「・・・・・・」

きらとはゆっくりと手に持っている剣を構える。

「貫け閃光、　スターライト・ブレイカー」

管制人格が詠唱を唱え終わると、右手の掌からスターライトブレイカーが放たれる。

「・・・シッ！」

剣を目の前にやると、正面から剣を振り砲撃を防御する。砲撃は威力が高く、きらとは後ろに強制的に動かされる。

「・・・でぇい！！」

無理矢理砲撃の軌道を海に向ける。すると砲撃は海に向かっていき海にぶつかる。

「・・・危なかった・・・」

両刃剣を分断し、双剣にし構える。

「いく・・・」

きらとは足に魔力によるブーストを掛けると、空を蹴り管制人格に向けて一気に駆け抜ける。

管制人格は手にシグナムが使っていたレヴァンティンを出すと、構える。

「・・・！」

右手に持つ剣で、薙ぎ払う様に剣を振るう。だが、管制人格は苦にも感じた顔を見せず簡単に剣を受け止める。

どんどんきらとは剣を振るっていくが管制人格は、片手一本で剣戟を防いでいた。

「・・・カートリッジ、ロード」

一旦離れ、両刃剣を繋げきらとがそう言うと、柄の部分が回転しカートリッジが使われる。

「・・・翡翠光刃」

きらとが剣をその場で一回、二回、三回と振るうと緑色の魔力刃が管制人格に向かって飛んでいく。

「紫電・一閃」

管制人格は冷静にカートリッジをロードすると、紫電・一閃を繰り出し翡翠光刃にぶつける。

ドォン!!!

二つの技がぶつかると、大きな爆発が起き二人の間に煙がでる。その煙から一気にきらとが出てきて、一瞬だけ隙の見えた管制人格を蹴る。

「クッ・・・!!」

管制人格は後ろに飛ぶとレヴァンティンを消し、掌から無数の魔力弾をきらとに向けて飛ばす。

だがきらとはそれをシールドを使わずに身を捩って、全てを避ける。

ＳＩＤＥなのは

「すごい・・・・・・」

なのはは闇の書の管制人格と謎の人物が戦うのを遠目からずっと見ていた。

二人は次から次へと技を出し、まったく隙が見えない。

「でも・・・」

なのはは迷う。自分は闇の書の悲しみの連鎖を止める為に管制人格に闘いを挑んだのだ。

けど、あの二人の戦いを見ていると自身がなくなってきていた。

『自分がいなくてもなんとかなるのでは？』

そんな思いが頭の中を駆け巡る。

「（でも駄目！私が、助けるって決めたのだから！！）」

なのはは決心し、空で戦っている謎の人物の方に飛んでいった。

ＳＩＤＥきらと

きらとは、戦っていると誰かが後ろから近づいてくるのが分かった。

「あの！！」

声からして女の子だと分かる。だがきらとはそんな声を気にすることは無く、戦闘に集中する。

「あなたはなんの為に戦うの！！」

その言葉に対してきらとは考える。

”自分は何の為に戦う？そんなのは決まっている全てはアンアック様のたｍ・・”

「・・・・・・！！！」

その時、きらとに頭痛が起きる。それはまるで忘れていた事を脳が無理矢理思い出さそうとしているかのようだった。

その隙を付き、管制人格がきらとに急接近し拳を振りかぶり接近する。

「危ない！！」

きらとの背後にいたなのはの叫び声に気付き、前を向く。すると目前まで管制人格が拳を振りかぶって接近していた。

「・・・チッ！」

咄嗟に後ろにジャンプして避けようとするが間に合わず、右頬に魔力を込めたパンチを食らう。

「グゥ！！」

その威力に意識が飛びそうになるが、必死に意識を繋ぎ止めやっとの事でとどまる。

「大丈夫！？」

なのはがきらとに近づきそう聞いてくる。大丈夫な分けない、そう叫びそうに成るのを押さえ込み、きらとは

「・・・おい、お前。名前は？」

「なっ、名前？私は、高町なのは。あなたは？」

なのはは返しに名前を聞いてくるがきらとはそれを無視し。

「・・・高町なのは、協力しろ」

「協力？」

「・・・ああ、僕一人ではあいつは倒せない。ならお前も手伝えば何とかいけるはず。」

「・・・・・・」

なのはは名前を教えて貰えなかった事を忘れ、考える。

「分かった、私も協力するの」

「・・・お前は後ろで援護、俺が突撃する。いいな？」

「うん！！」

「・・・それじゃあ、開始・・・！」

きらとはなのはに援護を任せ管制人格に突撃した！

第十七話　～闇の書～（後書き）

こんな話でよかったのか？そんな考えが私の頭の中をグルグルと駆け巡ります。

どうか！どうかご意見を下さい！！お願いします！！

第十八話　～最終直前～

「（アレに対抗するにはどうするか・・・）」

頭の中で対策を考える。アレは闇の書の管制人格、今まで蒐集した魔法を使える・・・。

「（とりあえず、臨機応変に対応するしかない・・・）」

デバイスを２ｎｄＦｏｒｍに変化させ、銃を両手に握る。

『・・・高町なのは、今から突撃する。援護しろ』

『わっ、分かったの！！』

念話で高町なのはに話しかけると、コイツは返事をし杖を構える。

「Ｇｅｔ　ｓｅｔ　ｒａｄｙ・・・Ｇｏ・・・！」

銃を構え、一気に管制人格に向けて飛ぶ。背後から魔力反応を感じながら右銃を相手に向け、三発撃つ。

「・・・」

管制人格はただ目の前にシールドを発動させて防御する。甘いんだよ・・・

「なっ・・・！」

魔力弾が当たった所から輝が入り始める。撃つ直前に魔力弾に防御

魔法破壊効果を付加させておいたから。

「・・・キック」

延髄蹴りのような感じでシールドに蹴りを入れる。

パキィン！

シールドは音を立てて崩れる。シールドが崩れたその瞬間。

「ディバインシューター・・・シュゥゥウト！！」

高町なのはがその隙を着き、魔力弾を放つ。

「甘い・・・ッ！！」

管制人格はシールドを張ろうとしたが、そうはさせないよ・・・。

管制人格をバインドで固定させシールドを張らせない。

ドォン！！

管制人格がバインドを破る直前、魔力弾が当たる。そこで一旦管制人格から離れ、様子を見る。

『・・・高町なのは、まだ反応は？』

『えっと・・・、ある！！』

高町なのはがそう言った瞬間、魔力弾が僕にあたる。

「・・・グゥ！！」

咄嗟のことで反応が出来なかった。頬を気にしながら体制を建て直し、前を見据える

「・・・・・・」

煙が晴れると、無傷にままの管制人格がいた。

「・・・・・・どうする」

対策を考える。すると突然管制人格は動きを止め、何所か聞き覚えのある声が聞こえた。

『外の管理局の人、聞こえます！！』

「はやてちゃん！？」

「・・・・・はやて？」

はやて？何故か何所か懐かしく感じる。

「（ぇ、なのはちゃん？）」

「（そのこ止めてくれる、そのこが走ってると管理者権限がつかえへんねん）」

「止めるって、どうすればいいの？」

その言葉に答えるのは、ユーノ

「（なのは、それとマントの君！判りやすく説明するよ…相手を魔力ダメージでぶっ飛ばして、全力全開手加減無しで！）」

「さすがユーノ君、わかりやすい！！」

『全くです』

全力前回手加減無しの魔力ダメージ・・・

「・・・・・・ボクが止める、君に任せる・・・・！」

両手に持っている銃をトンファーの形に変化させ、突撃する。

「・・・キック・・・・！！」

足に魔力を込め、管制人格に向けて蹴りを繰り出す。

「・・・」

軽く避けられ管制人格が右手で殴りかかる。けどそれを首を軽く捻り避ける。蹴りの勢いのままトンファーで二回、三回と連続で攻撃する。

「クッ・・・」

幾つかが掠り、管制人格はくぐもった声を上げるがやがり決定打にはならないか・・・

『君！！今から砲撃するからどいて！！』

そう聞こえるがまだ駄目だ・・・。そう思いながら念話を飛ばす。

『高町なのは、合図をしたらやれ・・・』

『了解！！』

近距離で管制人格の攻撃を避けながら、こちらも攻撃をする。だが、こちらの攻撃も全て避けられてしまう。

「・・・しょうがない・・・・・・！」

攻撃と防御を止め、業と管制人格の攻撃を腹に受ける。

「ゴフッ・・・・・・！！『いまだ・・・やれ！！』」

「！！」

腹に攻撃を受けた瞬間、バインドで腕と足を固定し、その場からどける

「レイジングハート！！」

『Ｂａｒｒｅｌ　Ｓｈｏｔ』

その声が聞こえ、管制人格に見えない衝撃が走り磔の様に空中で固定する。

「いくよ！エクセリオンバスター・・・フォースバースト！！」

レイジングハートの前方に溜められたスフィアから４本の魔力砲撃が放たれ…管制人格へ向かう、そして直撃し…最後にそれら全部をあわせるように一本の太い砲撃が直撃する。

爆発し煙に包まれる守護者…次の瞬間なかから白い光りが溢れ、金の光りが天に登っていく。

そこにいたのは

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9404j/

魔法少女リリカルなのはA's～兄妹の絆～

2011年8月29日19時36分発行